

# グレイト外伝 異世界最強決定戦！

匠 良心

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

勇光達が異世界の戦いをしている時、別の世界では全ての異世界の最強を決める 異世界最強決定戦が開催しようとしていた。

主人公 ONEPIECE モンキー D ルフィ

トリコ トリコ

ウルトラマン超闘士激伝 闘士タロウ

サイボーグクロちゃん マタタビ

僕のヒーローアカデミア 麗日 御茶子

魔法少女特殊戦 あすか 大鳥居 あすか／ラブチャーあすか

## 目次

|     |                        |     |
|-----|------------------------|-----|
| 1話  | 謎の女戦士と異世界の守人           | 1   |
| 2話  | 闘士タロウ対デク               | 8   |
| 3話  | 違和感 トリコ&マタタビ           | 31  |
| 4話  | あすかの意地                 | 50  |
| 5話  | 約束 闘士タロウ対武者頑駄無         | 69  |
| 6話  | 正体 あすか&ルフィ対プリズムナイト     | 83  |
| 7話  | 異変への探索                 | 99  |
| 8話  | 私の本気！ウラビテイ対闘士ヒカリ       | 121 |
| 9話  | 決着！ルフィ！あすか！マタタビ！闘士タロウ！ | 133 |
| 10話 | ラパパの正体！私はプリキュアになる！     | 147 |
| 11話 | 集結 6人の戦士！              | 166 |
| 12話 | 形勢逆転！グレイトスーツ！          | 194 |
| 最終話 | 復活！銀河の覇者 ギャラクシーキュアブラック | 204 |

# 1話 謎の女戦士と異世界の守人

魔法少女 マジカルファイブ

とある世界……かつて地冥界デイスアスが現れ人類にあり得ないほどの被害が繰り返された。

だがそれらに立ち向かう者がいた。

不思議な魔法の力を得た少女 魔法少女

彼女達の戦いは苛酷なものだったが、地冥界の王 冥獣王を倒し平和が戻った……

その前に……

? 「ふん!」

バキッ!

ウォーナース 「きやあつ!」

ドガッ

ジャストコーズ「うあっ！」

ガッ！

双頭竜「ああっ！」

バキンッ！

フェーニクス「ガッ！」

謎のハットを被った女性がマジカルファイブの四人を圧倒した。

？「フンッ！この程度か……」

ラブチャー「ラブチャー・タロン!!」

？「むっ！」

ガキンッ！

？「フンッ！」

ラブチャーの必殺技であるラブチャー・タロンが謎の女に当たったがそれを生身の腕で弾き返した。

ラブチャー「みんな！」

マジカルファイブのリーダーラプチャーあすかが駆けつけ謎の女と対立した。

ジャストコーズ「気をつけるあすか！こいつかなり強いぞ！」

ラプチャー「サツチュウ 魔力解析！」

サツチュウ「了解だちゅー！」

ラプチャーは人工生命型妖精 サツチュウに謎の女による解析を調べたが結果……

サツチュウ「そんな……」

ラプチャー「どうした？サツチュウ」

サツチュウ「こいつには魔力があまり感じられないちゅー！まるで空っぽみたいちゅー！」

ラプチャー「空っぽ？」

？「ふん！プリズム！サニーファイヤー！バーニング！」

ゴウウウツ！！

ラプチャー「なっ!？」

ドオオオー！ー！ー！！

ラプチャー「きゃあああ!!」

謎の女の必殺技でラプチャーは倒れた。

「「「あすか!!」」」

どんな冥獣でも戦い最後の冥獣王を倒したあのあすかが謎の女に倒されたことに一同は声をあげた。

ラプチャー「貴様……何者だ?……まさかデイスアスの……」

?「デイスアス?そんな生易しい者ではない。我が名はプリズムナイト、強きものと戦う戦士……」

それだけを残しプリズムナイトは空間を剣で切り裂き次元の穴を開けて去ろうとしたが……

ラプチャー「させるか!!」

ウォーナーズ「あすかさん!」

ジャストコーズ「何考えてんだ!」

ラプチャーは死物狂いでプリズムナイトを追うように次元の穴に入った。

そしてその穴は徐々に閉じられ元の空間に戻ってしまった。

ウォーナーズ「あすか……さん」

ジャストコーズ「バッカヤロオオオオオーーーーー!!!」

そしてとある世界

ここは偉大なる航路グランドラインの後半、新世界  
その海に冒険する一つの船の船首に麦わら帽子を被った少年が  
いた。

キラン

ルフィ「ん?なんだ?」



彼の名はモンキー D ルフィ ゴムゴムの実を食べゴム人間と  
なった少年であり、この海で最悪の世代の一人と恐れられている一人  
であるが、彼自身、あまりそういう粗暴ではない。

ルフィは頭上から現れた金色のカードが現れそれを手に取った。

『おめでとうございませーす!!』

ルフィ「うわっ！なんだあ？」

突然、金色のカードから立体映像が飛び出しルフィは驚いて海に落  
ちそうだったがなんとか踏ん張って助かった。

ルフィ「なんだよ！お前？」

？『私は異世界を守護する守人、ラパパでーす♪今あなたは異世界  
最強決定戦の代表に選ばれることになりました!』

ルフィ「いせかい？最強決定戦？なんだそりゃ？」

ラパパ「優勝すれば願いを叶えることができませーす！そう例え  
ば……お肉食べ放題とか……!」

ルフィ「えええー！！肉食べ放題!!行く！行く！」

ルフィはどんな時でも肉だけは目が離せないのであった。

ラパパ 「それではごあんなーい!!」

シューーーーーーン!!

ルファイはラパパの掛け声とともに光と供に消えた。

2話に続く!

## 2話 闘士タロウ対デク

ルフィ「んあ？ここは？……ってなんだああーこりやああー！！！！」

ルフィがたどり着いたのはそこはなんとありとあらゆる異世界からやって来た戦士達がたくさんいるのであった。

ラパパ「みなさーいん！大変長らくお待たせいたしました！ようこそ！異世界エントランス エンドへ私は異世界の守護者ラパパでえーす！」

ルフィ「あいつは……」

ラパパ「早速、大会を開く前に5人1組チームを分けるよー！！ラパパパ！パーー♪」

シユン！ シユン！ シユン！ シユン！ シユン！ シユン！  
シユン！ シユン！ シユン！ シユン！ シユン！ シユン！

ラパパの謎の呪文で160人の異世界人達がチーム分けをするため瞬間移動をした。

ルフィ「どんな奴と組むのかわくわくすんなあ」シユン！

シュン！

ルフィがたどり着いたのはホテルの一室に近い小部屋であった。そしてルフィと一緒に戦うのは……

トリコ「ルフィ！お前も来てたのか!？」

ルフィ「トリコ!!」

トリコかつてルフィがハングリラ島で出会ったことで友達となった青髪の大男。職業は未知なる味を求める美食屋である。

トリコ「ルフィ！またお前と一緒に戦うとはな！嬉しいぜ！」

ルフィ「俺もだ！」

ルフィとトリコは互いに拳を突きつけた。

？「あなた達は二人はお知り合いだったんですね」

ルフィ「ん？なんだお前？」

ルフィの目の前にいるのは体は赤く頭は二本の角に真ん中に立つ

トサカ、作者いわく国民的ヒーローでも別の世界にいたルフィにとって未知の存在であった。

？「はじめまして、僕は闘士ウルトラマンタロウ 宇宙の彼方の光の国から来たウルトラ戦士です」

ルフィ「えええー！！宇宙！！てことは宇宙人か！！？」

闘士タロウ「え？あっはい！」

ルフィ「じゃあ……まさか、ビームとか出んのか？」

闘士タロウ「え？そりや出るけど……」

ルフィ「うおおおおおおお！！！！！！」

闘士タロウのあまりの質問の答えにルフィは感激し興奮状態が治まらないでいる。

ルフィ「じゃあビーム出してくれよ！ビーム！ビーム！」

闘士タロウ「え？今ここで？」

ルフィ「ビーム！ビーム！ビーム！ビーム！」パンパンパンパン！

？「あ……あのー」

トリコ「えつとお前は……」

ルフィは闘士タロウに興奮状態になるときすこしおずおずと自己紹介する少女がいた。

麗日「私！麗日お茶子、雄英学園！1年A組 個性は無重力です」

トリコ「無重力って……一体どんなのなんだ？」

麗日「えっと例えば……」

麗日は用意されていたテーブルに触れるとテーブルが徐々に浮き始めていた。

トリコ「おっすげえ！」

麗日「ありがとうございます／＼／＼」

興奮状態が治まったルフィはトリコ、闘士タロウ、麗日の紹介が終わって最後の5人目を探した。

ルフィ「えっと……5人目は誰だ？」

？「拙者だ」

ルフィ「ん？」

トリコ「お前？」

麗日「うわあ！猫ちゃん！」

ソファアーの上に座っているのはマントを着け耳はすこし傷があり最大の特徴は左目に眼帯を付けたとら猫であった。

闘士タロウ「君……さつき喋らなかつた？」

？「喋ったぞ！」

「「えええー！」「！」」

猫の言葉に四人は驚いた。

？「拙者の名はマタタビ！拙者はある猫を倒すため日本中を旅してきた」

麗日「日本中を？」

ルフィ「？」

トリコ「？」

ルフィとトリコは日本と呼ばれる国は分ならず別の世界の日本にいた麗日は話を続けた。

麗日「その左目と関係あるん？」

麗日はマタタビの左目を指差してマタタビはかつてその猫に目んたまをくりぬかれたことを思い出す。

マタタビ「ああ、今は奴と一緒に住んでいる。だがいずれは倒すつもりだ！」

麗日「一緒に住んでいるってことは仲直りしたんやね」

マタタビ「仲直りなどしてねー!!」

麗日の言葉にマタタビは激怒した。

ルフィ「あひやひやひやひや!!おもしれーなお前ら！」

ルフィは一緒に戦うチームとの触れあいに笑いがこぼれました。

ルフィ「俺はモンキー D ルフィ!海賊王になる男だ！」

闘士タロウ「え？」

麗日「それだけ？」

マタタビ「もつと他にもあるだろ？」

ルフィ「え?んー?他に・・・ねえや」

ガクツ!

ルフィの能天気な解答に二人と一匹はずっこけた。

トリコ「ははは!ルフィはそういう奴さ」

一緒に戦ってきたトリコは呵々大笑しながら答えた。

ラパパ「みなさー!チームになった人たちと馴染んでいる所・・・30チームが揃いましたああ!!どうぞ！」



ガッツ ルフィ トリコ 闘士タロウ マタタビ 麗日

ヒーローのたまご デク メガネ 無免ライダー 峰田 上鳴

侶  
SUGITA 銀時 クロム エスカノール ジョセフ 蜥蜴僧

ニヤン  
KAJI メリオダス アリババ 一誠 劉備ガンダム フユ

剣士 闘士ヒカリ メタナイト シグナム セイバー マルス

サムライ 剣心 神田ユウ 勝四郎 迅三郎 豊久

ロボ ロックマン ミー メタビー ロクショウ ?

キック サンジ 春麗 天哉 リゾット ?

パンチ マック 間柴了 ボンチユー 太尊 星矢

女戦士 更識楯無 シャルロット デュノア スバル ヴイータ  
クロメ

武者ガンダム 武者マークII 武者ビクトリー 武者ゴツドマル  
剛覇ガンダム 武者頑駄無 零壺

騎士ガンダム 騎士ゼータガンダム インディガンダム 騎士  
シャインガンダム 騎士エックス 法術士ニユー

相撲 鯉太郎 天雷 火ノ丸 蒼希狼 ?

お年寄り たけしのばあちゃん 一龍 節乃 次郎 砂かけ

超人キン肉マンソルジャー マンモスマン ロビンマスク  
ウオーズマン アシユラマン

地獄 レッドJ マイティードッグ ロボニャン3000 キャ  
プテンサンダー

大ボケ じーさん 校長 山田太郎 首領パッチ ボーボボ

ゲーム マリオ ソニック リンク ドンキー カービィ

クール クラウド スコール サスケ 伽羅 ?

魔法少女 美樹さやか 巴マミ スノーホワイト

擬人化 長門 吹雪 天龍 安定 三日月

サイヤ人 悟飯 悟天 トランクス ラディッツ バーダック

ガンマン 次元 冴羽 リザ シノン ?

プロレス タイガーマスク タイガーザダーク (テリーマン テ  
リーザキッド バッフアローマン) プロレスサイド

忍者 カカシ 利吉 留三郎 赤影 ニンジャスレイヤー  
裸 ターちゃん 変態仮面 サービスマン ぷりぷりプリズナー  
橙次

怪力 花山薫 バーサーカー ザンギエフ タンクトップマス

ター

エリート 闘士ネオス ベジータ？？？

ポケモン リザードン ゲッコウガ ガオガエン ルカリオ  
ブリアス

動物 イギー ウイード 芥子 チョツパー ハッピー

ラパパ 「以上が30チームの組み合わせです！」

闘士タロウ 「僕達が・・・ガッツチームって」

麗日 「なんかいい!!」

ルファイ 「なんかおもしろー奴いそうだな！」

ラパパ 『それではここからはシャツフル形式で執り行いたいと思いまーす!』

シャツ！シャツ！シャツ！シャツ！シャツ！シャツ！シャツ！  
シャツ！

ラパパ 『それでは1回戦対戦するチームはこちら!』

ガッツチームVSヒーローのたまごチーム  
相撲チームVSプロレスチーム  
ロボチームVSポケモンチーム  
サイヤ人チームVS忍者チーム  
大ボケチームVS擬人化チーム  
クールチームVSエリートチーム  
女戦士チームVS魔法少女チーム  
裸チームVS地獄チーム  
パンチチームVSキックチーム  
武者頑駄無チームVSゲームチーム  
超人チームVSお年寄りチーム  
ガンマンチームVS剣士チーム  
騎士ガンダムチームVS動物チーム  
怪力チームVSBUGITAチーム  
サムライチームVSKAJIチーム

対戦標識が決定された時、闘士タロウの写真が光っていた。どうやらタロウとヒーローのたまごチームの誰か一人と戦うらしい。

闘士タロウ「最初は僕か・・・行ってきます!」

麗日「いつてらっしゃーい」

トリコ「頑張れよ!」

ルフィ「勝てよー!!」

ステージ 廃工場

闘士タロウ「ん？」

ヒーローのたまごチームの一人として出てきたのは

デク「よろしく願いします！」

僕のヒーローアカデミア 緑谷 出久ことデクであった。

闘士タロウ「最初の相手は君か……地球人なのに強い力を感じるよ……」

デク「あなたも困っている人のために戦うヒーローの先輩として感謝します」

闘士タロウとデクは互いに讃えた。

ラパパ『それでは開始の前にルールの説明です！みなさんが攻撃されても血とかそういうグロテスクな物が出さないように防御シールドで防いでます！けどダメージは受けますのでそこは注意しましょう！そしてみなさんの後ろに浮いているブラックストーンをゲット出来たら勝利条件です』

戦いの公式はダメージが出たとしても防御シールドで身を包んで  
いるので血あるいは怪我などは控えているらしい……。そして勝利  
条件はあの「ブラックストーン」と呼ばれる石をゲット出来たら勝  
利らしい……。

ラパパ『それでは！レディーゴー!!』

デク「ふん！」

闘士タロウ「!!」

デクの体から緑色の稲妻が走り戦闘体勢に入った。

ヒュンツ!

ドガツ!

闘士タロウ「ぐっ！」

デク「当たった！」

トリコ「なんだありや！」

マタタビ「動きが見えなかった!？」

トリコとマタタビはデクの動きに驚きを隠せず啞然とし、デクと一  
緒にいた世界の麗日はデクの戦いを見ているので二人に説明した。

麗日「デクくんは初めて会った時は試験会場だったんよ。その時デカイのが出現して私達はもうダメだと思ったんやけど、一人で突っ走って来たデクくんはそれを一撃で倒したんよ」

ルフィ「いつ一撃で！」

麗日「最初は個性使うたびに大きい怪我とかしてたんやけど、徐々にそれがなくなって前よりももっと強くなってるんよ」

麗日はそれを誇らしげに説明するが、それを見ていたマタタビは圧倒されている闘士タロウを見てすこし不安げだった。

マタタビ「だがここで拙者達のチームが負けたら……もとも子もないぞ」

デク「はあっ！」

バキッ！

闘士タロウ「くっ！」

闘士タロウはデクの個性ワンフオーオールの攻撃で防ぐのが精一杯であった。

攻撃力、瞬発力、反応速度など闘士タロウでも追いつけないほどである。

デク「このまま！一気に倒す！」

デクの蹴りで勝利と確信……したと思いきや

ガシツ！

デク「え？」

闘士タロウ「確かに君の力、攻撃力、瞬発力、反応速度は大したものだ……でも防御のほうはまだまだだね。」

ぶん！

デク「え？」

ドオオーン！！

闘士タロウはデクの蹴りを受け止め、それを思いっきり地面に叩きつけた。

デク「うわあああ！！」





超闘士タロウは右腕を握らせ力を右腕に集中させた。

デク 「デトロイト!!スマーーーーッシュ!!!!」

超闘士タロウ 「アトミック!超光拳!!」

ドオオオーーーーー!!!!!!

拳と拳の激突に爆発した!

ルファイ 「うおっ!」

トリコ 「すげえ戦いだ……………」

麗日 「デクくん……………」

勝負の行方は……………」

デク 「ううっ……………」

闘士タロウ「はあ、はあ、．．．」

立っているのは闘士タロウであった。

ルフィ「よっしゃ！」

トリコ「やったぜ！」

マタタビ「喜ぶのはまだはやい！あの石を取らなきゃ勝利じゃねえ．．．」

麗日「デクくん．．．」

デク「凄い．．．別の世界の人達もそんな力も持っていたんですね．．．」

闘士タロウ「何．．．君の力も大したものだったよ」

デク「そんな．．．僕は全然ですよ．．．いろいろと悩んだり．．．」

てめえに何が出来んだよ？

かつて中学生だったデクが幼馴染みに言われたことにすこし不満

を持っていたが闘士タロウはゆっくりデクに近づいてきた。

闘士タロウ「君が何を悩んでいるのかは知らないけど……かつて僕にもこの力の使いかたがわからないことがあったんだ。」

デク「え？」

かつてのタロウも元の宇宙では敵であり師でもあった宇宙人に鍛えられ力を引き出すことに成功した。

だが強敵の宇宙人を前に力を引き出せなかったことがあった。

しかしその闘士タロウに唯一アドバイスをくれた人物

かつてあらゆる強敵と闘い宇宙を何度も救ったウルトラ戦士

闘士ウルトラマンである。

闘士タロウ「その人が言ってたんだ……もし私が伝説の戦士と呼ばれるに値する男だったとしたら……それは黄金に輝くオーラでも底無しのパワーでもない」

デク「……………」

闘士タロウ「みんなをどんなことがあっても守り抜きたいという使命感……！ウルトラ魂だ！」

デク「ウルトラ魂……………」

デクは闘士タロウのその言葉に胸を響かせていた。

闘士タロウ「君も元の世界でもう一度だけ立ちあがり心を燃やして見るんだ!!」

デク「心を燃やす・・・！ありがとうございます！」

デクは立ちあがり闘士タロウの腕をガッチリ握手した。

これを見ていたガッツチームは

麗日「デクくんまた一步強くなったね・・・」

ルフィ「かつこいいぞー!!」

トリコ「いいバトルだったぞー！」

闘士タロウとデクの戦いに歓喜の喜びを送った。

闘士タロウ「これだな」

闘士タロウは宙に浮かんでいるブラックストーンをキャッチし試合終了の合図が出た。

ラパパ 『ウイナー!!勝者はガッツチーム!!』

デク 「僕もあなたの言う通りに心を燃やします!」

シユン!

それを言い残しデクは消えた。

闘士タロウ「……………ん?」

闘士タロウは一瞬ブラックストーンの力に何か異様な力を感じた。

シユン!

闘士タロウ「あっ!」

ブラックストーンは闘士タロウの手から消えてしまった。

闘士タロウ（何だったんだ?あの石には何か邪悪な力を感じた……………）

闘士タロウはブラックストーンに不満を持った時、何やら上から稲妻が走り闘士タロウは一瞬構えたが空間に穴が出現しそこに人らしき姿が落ちてきた。

闘士タロウ「これは……」

そこにいたのはマジカル5のリーダー、ラブチャーあすかだった。

サツチュウ「あすかー!!」

そしてその穴から降ってきたのはネズミ型の妖精サツチュウだった

闘士タロウ「君達は……」

サツチュウ「誰だちゅう!!お前は」

闘士タロウが近づいてきてサツチュウは警戒体勢に入ったが闘士タロウはゆつくりと話しかけた。

闘士タロウ「僕は闘士タロウ、君達の敵じゃない……君達もあのチケットを受け取った人達なのかい？」

サツチュウ「チケット?何だちゅう?」

闘士タロウ「え?」

ラパパ 「きゃはは♪どんどん勝って貯まる貯まるー♪」

今、バトルで勝ち進んで手に入れたブラックストーンが徐々に謎の機械に収集されていった。

ラパパ 「計画は今のところ順調・・・このまま行けば・・・」

ラパパは座っている椅子の隣に持っている本に目を通した。

それはプリキュア・・・魔法つかいプリキュアの本であった。



一方とある世界

? 「ここが例の洞窟らしいぜ! 相棒」

? 「確かか? モツプル」

洞窟の入口でボロボロのマントを羽織い背中に大剣を担いだ高校生くらいの青年と赤い小さな妖精モツプルが言った。

モツプル 「おう!」

? 「じゃあ行くぞ・・・」

青年とモツプルはその洞窟の中に入った。

つづく

### 3話 違和感 トリコ&マタタビ

プリズム ナイト「ふん！」

ブシユウウツ!!

ラブチャー「がああっ!!」

あすか「はっ！」

眠りから覚めたあすかは周りを見渡した。

あすか(ここは……確か私は奴を追おうとあの穴に入ってから……  
そこから……)

麗日「あっ！目覚めたんだね」

あすか「君は……」

麗日「私、麗日お茶子、あなたは？」

麗日に名前を紹介されてあすかは一応魔法少女のことについては  
隠そうと思った。

あすか「あすか……大鳥居あすかだ」

麗日「大鳥居さんって言うんだ！よろしく」

あすか「ああ、よろしく」

麗日とあすかはお互い握手し、麗日はあすかにある言葉を発した。

麗日「大鳥居さんも招待チケットを持ってこの世界に来たの？」

あすか「招待チケット？なんだそれは？」

麗日「これだよ！」

麗日は懐から金色のチケットをあすかに見せた。

あすか「それは……」

麗日「これね、なんかいろいろな世界の人達が集まって……その人達とチームを組んで優勝したら自分達の願いが叶えられるんだって！」

あすか「願いが叶う……?」

あすかは麗日の言葉にすこし疑問を抱いてしまった。

麗日「そういえばあなたと一緒にいた小さくて黒い子が心配してたんだよ」

あすか「小さくて……黒い?……サッチユウ！」

サッチユウ「ちゅうううううううううううう!!!」

あすか「!？」

麗日「!?!」

突然外からサツチュウの声がしてドアを強く開けて出てきたのは、

サツチュウ「やめろ!やめろちゅー!」

トリコ「おい、こいつ一体どんな味がすんだ!はやく食ってみてー!!」

ルフィ「おい!トリコズリーぞ!!俺が先に食う!」

ルフィとトリコがサツチュウを食おうと歯を剥き出しにする。

あすか「サツチュウ!」

サツチュウ「あつ!あすか!」

サツチュウは二人を引き離しあすかの所に近づいた。

サツチュウ「あすか!もう大丈夫ちゅう?」

あすか「ああ、大丈夫だ」

サツチュウはホツとし後から入ってきた闘士タロウとマタタビが入ってきた。

闘士タロウ「やっと目覚めたね」

あすか「あんたは……」

サツチュウ「あすか!こいつがあすかを背負って来た奴ちゅう!」

闘士タロウ「初めまして 僕はタロウ」

トリコ「俺はトリコ」

ルフィ「俺はルフィ」

マタタビ「拙者はマタタビ」

あすか「!？」

マタタビが喋ったことであすかは警戒体勢に入った

あすか「お前今喋ったか？」

マタタビ「喋ったぞ？」

あすか「まさか精霊界、デイスアスの奴じゃ……」

マタタビ「その精霊界とかデイスなんとかって言うのじゃねー訳のわからん日本語を使うな」

あすか「じゃあ何で喋れるんだ？」

マタタビ「根性だ！」

あすか「……」

サッチユウ「……」

麗日「ぶっ！あはははははははー！」

トリコ「はははははははははは！」

闘士タロウ「あははははははははは！」

ルフィ「あひやひやひやひやひやひやひや!!」

あすか「？」

突然みんなが笑いだしてあすかは呆然とした。

麗日「ごめん……大鳥居さんとマタタビくんの会話でつい……」

ルフィ「お前……おもしろいな！」

あすか「／／／」

あすかはすこし赤らめてソファの方座った。

あすか（なんかこいつらといると……似てるな）

あすかはあの大战で共に戦った仲間達のことを思い出した。

ラパパ「いいところ悪いんだけど……ちよつといいかな？」

「「「?」」」」

あすか「?」

いつのまにかラパパがガッツチームのソファアーの上で不機嫌そうに座っていて彼らはそれに気づかなかった。

ラパパ「招待チケットを持ってない人がチームに入っていることは厳禁！レッドカードです」

ラパパはレッドカードを取り出してあすかを批判した。

ラパパ「というわけであなたとそこのペットは一刻も早く元の世界に帰ってくださいーい！」

サツチュウ「ペットってなんだちゅー!!」

ラパパの言葉にペットと呼ばれたサツチュウは怒り、ラパパは鋭くあすかを睨んだ。

ラパパ「ここは・・・自分達の願いを叶えるために戦う所なの！そんな神聖な場所にあなたのようなイレギュラーがいると迷惑なのよ！」

あすか「!っ」

ラパパ「わかったらとっとと帰るかそこでじっとしていることね」

あすかは落ち込んでしまいいここに自分がいるとかえって彼らに迷惑をかけてしまうということを思ってしまう。

麗日「ねえ、あすかさん……っていいかな」

あすか「?」

麗日「うちら別に迷惑とか思っていないよ。ただ友達が一人増えたってことで嬉しいよ」

あすか「嬉しい……」

麗日「だからあすかさんもここに……うちの仲間になってもいいよ!」

あすか「お茶子……」

ラパパ『それでは1回戦が終了したので、1回戦を突破したチームがこちら!』

ガッツチーム

相撲チーム

ロボチーム

忍者チーム

擬人化チーム

クールチーム

女戦士チーム



地獄チーム  
キックチーム  
武者頑駄無チーム  
お年寄りチーム  
剣士チーム  
動物チーム  
SUGITAチーム  
KAJIチーム

ラパパ『以上が1回戦突破した15チームです!』

一同は勝ち進んだチームを見て感心した。

マタタビ「ミーのいるチームは確かロボだったな」

ルフィ「サンジのいるチームも勝ったんだな」

ラパパ『そして!2回戦戦うチームはこれだ!』

ガッツチームVSロボチーム  
相撲チームVSクルルチーム  
地獄チームVS武者頑駄無チーム  
キックチームVS SUGITAチーム  
KAJIチームVSお年寄りチーム  
剣士チームVS女戦士チーム  
擬人化チームVS動物チーム

ラパパ『今届いた情報によると忍者チームはリタイアということが  
判明されました!シヨボーン』

闘士タロウ「忍者チームがリタイア!？」

ガッツチームの相手はロボチーム、2対2の対決でトリコとマタタビが出場することになった。

トリコとマタタビ対ミーと？

マタタビ「ミーと戦うのは初めてだな……」

トリコ「?」って誰が出るんだ？」

ステージ 岩場

ミー「マタタビくんと戦うのははじめてかな」

マタタビ「ミー……拙者がいない間キッドとはライバルとして  
見てるようだが……どれ程の実力か」

トリコ「なんだ知りあいか？」

マタタビ「拙者が行き倒れになってるところをアイツとその主人に助けられたんだ……お互い倒したい奴がいる同士でな……」

トリコ「?」

『そしてロボチームに所属する?の選手は……』

?「僕です！」

マタタビ「裸！」

トリコ「赤いブーツと二本の角みたいな髪型」

ラパパ『ミーそして?は空を越えて星の彼方行くぞ!鉄腕アトムです!!』

そう21世紀の未来で作られたロボットであり、七つの力である電子頭脳、聴力、十万馬力 サーチライト、ジェット噴射 人口声帯マシンガンなどがある。

ラパパ『それではレディーゴー!!』

トリコ「はああ！」

アトム「やああ!!」

ドオオーン!!!

トリコとアトムの両者の力比べの取っ組み合い!じりじりと相手を押す!トリコはグルメ細胞と呼ばれる細胞をもちそれでありとあらゆる猛獣をハンティングした美食屋でもある。

そしてアトムはこれまで幾多の敵ロボット、あるいは宇宙人なども相手にしてきた。自慢の十万馬力がトリコを追い詰めていく。

トリコ「なっ何!?!」

アトム「パワーは僕の方が上ですね!」

一方 マタタビ対ミー

ミー「やあああー!!」

マタタビ「うおりやあああー!!」

ガキン!!ガキン!!ガキン!!

マタタビとミーのブーメランと剣の火花が散った。

ミー「ふん!やああ!!」

チャリン！

マタタビ「なっ！」

ミーの鋭い剣さばきにマタタビの手からブーメランを弾き飛ばした。

マタタビ「なんの!!」

ビュンツ！

マタタビのマントから剣と斧、鉄球、槍などの多数の武器を飛ばした。

ミー「悪いけどそれは通用しないよ！」

ズバツ！バシユツ！バシユツ！ズバツ！バシユツ！ズバツ！バシユツ！

武器を飛ばしたがミーのスピーディーな剣術で全て切り裂いた。

だが

ミー「え！マタタビくんがない！」

マタタビ「オラアアア!!」

ミー「！」

正面にマタタビがないことに気づき声が聞こえた方向、上を見上

げるとそこにはマタタビのもうひとつの武器であるチェーンソーを取り出した。

チユイイイイイーイーイーイーイー  
!!!!

ミー「くっ!」

ドオオーオン!!!

マタタビのチェーンソー攻撃にギリギリかわしたミー、だが武器の剣がチェーンソーによって破壊された。

ミー「さすがだねマタタビくん、あのクロをここまで追い込むことがよくわかる」

マタタビ「お主こそ拙者がいない間キッドと張り合ってあれほどの強さ……」

マタタビの言うキッドとミーの言うクロと呼ばれる黒猫、破壊のプリンスと呼ばれるその黒猫はミーを育ててくれた博士によってサイボーグとして蘇り暴れるのが好きな猫であり本人はただのんびり過ぎたいただけなのである。

一方、控え室でモニターを見ているルフイ、麗日、闘士タロウ、あすか、サツチユウ

麗日「すごいマタタビくん、マントの中からあんなに沢山の武器

を持つてるんだ!?マントの中ってどんな風になってるんだろ?」

サツチュウ「マジックアイテムの一種でチュウ?」

ルフィ「それにトリコと戦ってるアイツもスゲーな」

トリコと力比べをするアトムを見てルフィは思った。

ルフィ「なんかアイツ裸でパンツ一丁ってフランキーに似てんな」

あすか「誰だ?」

ルフィ「2年前はアロハシャツと海パンでおもしろー奴なんだ。今はロボになってロボットに乗って戦ったりするんだ」

あすか「アロハシャツと海パンって……しかもロボになってロボに乗るって……どんな奴なんだ?」

闘士タロウ「……………」

麗日「どうしたのタロウさん?」

闘士タロウはあの一回戦で手に取ったブラックストーンが気にかかっていた。

あの時手に取ったあの異様な感じ、何かいやな予感がすると感じテレパシーで他のウルトラ戦士に伝えようとするタロウ……だが

闘士タロウ（ヒカリ！ネオス！応答してくれ！ヒカリ！ネオス！）

一向に通じない・・・まるでこの世界全体に結界でも張っている  
ような・・・

ラパパ『あーーーーーつとここでガツツチームとロボチームの間に  
謎の戦士が乱入!?』

「「「「「?」」」」」

トリコ「10連釘パンチ!!」

アトム「やあああっ!!」

ドオオーーーーーん  
!!!

ドン!!

アトム「うわっ!」

ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!

ピシッ!

トリコの10連釘パンチでアトムの腕にヒビが入った。



マタタビ「オラッ！オラッ！オラッ！オラッ！」

チュイイイイイー————ン  
!!!!

ミー「はい！はい！はい！はい！はい！はい！はい！はい！」

キン！キン！キン！キン！キン！キン！キン！

マタタビのチェーンソーとミーの包丁で攻防を繰り返していた。

その時、

プリズムナイト「貴様らは強き者か・・・？」

「「「!?」」」

サツチュウ「あすか！あいつ！」

あすか「プリズムナイト!!」

麗日「えっ！ちよっ！あすかさん!?!」

あすかは控え室から出て行った。

「あすか「今度は逃がさない！待っている!!」

とある洞窟内部

洞窟の中で歩き続ける青年、そして妖精

たどり着いた先は多数の石柱が立ち並ぶ広い部屋だった。

そして歩くとそこに壊された石柱の上にスピリットフィギュアがあった。

モツプル「おい！これが依頼された奴らしいぜ」

モツプルは写真を取りだし写真を見合せながら確かめた。

？「これが未来のヒーローのフィギュアか……」

モツプル「ああ、えーっとこれが仮面ライダーシノビ、仮面ライダークイズ、仮面ライダーキカイ、」

そしてスーパー戦隊のスピリットフィギュアであろう5人一組のフィギュアがあつた。

モツプル「解析するぜ！」

モツプルは首にぶら下がっているアイテムでフィギュアを解析した。

モツプル「わかった！こいつは戦国戦隊 ムシャレンジャー！そしてこれが御伽戦隊メルヘンジャー そんでこれが医療戦隊 ドクタージャーらしいぜ」

今度はウルトラマンの方を調べた。

モツプル「これはウルトラマントウガ、ウルトラマンアキレス ウルトラマンジュエル！」

そしてガンダムの方は……

モツプル「ガンダムグリード アルフォースガンダム ビルドブラストガンダムだそうだ」

？「どれも見たことないな．．．んっ？」

その時、何かを感じた青年は頭上を見上げるとそこには

キュアロイド『ギギギー!!!』

ドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツ

モツプル「げっ！こいつらは．．．」

？「プリキュアを模したデク人形ども．．．」

頭上から現れたのはプリキュアオールスターズをモチーフとした  
ロボット、キュアロイドであった。

モツプル「どうする．．．相棒？」

？「無論．．．殴り倒すだけだ．．．」

青年の右手から黒い稲妻を発していた。

t o b e c o n t i n u e d

## 4話 あすかの意地

プリズムナイト「お前達か……強き者は」

マタタビ「え？」

ミー「あいつは！」

アトム「あれは……」

トリコ「誰だ？」

突然、バトルステージから現れた騎士甲冑を纏った女性……その名は

プリズムナイト「我が名はプリズムナイト、強き者と戦う戦士！」

一件疑問に思う一同であったがただ一人ミーだけは怒りを隠せないほどに向かっていった。

ミー「お前……！！！！」

マタタビ「ミー!?!」

突然、ミーが怒りをプリズムナイトに向けて襲いかかった。

プリズムナイト「？」

ガキン!!

ミー「お前! 剛くんをどこへやった!!?」

プリズムナイト「剛? なんの話だ?」

ミー「とぼけるな!! あの夜お前が剛くんを担いで行った所を僕は見たんだ!! 答えろ!」

プリズムナイト「知らんな!!」ブオンツ!!

バキイーン!!

ミー「うわあああ!!?」

マタタビ「ミー!!」

プリズムナイトの一撃でミーの頭部以外体はバラバラに砕かれてしまった。

マタタビ「貴様!」

ブオオオオオooooooooooooon!!!!

マタタビはチェンソーを最大出力で発揮させプリズムナイトに斬りかかった。

だが、

キイイイイーーーーー！！！！

マタタビ「何!？」

なんとプリズムナイトはチェーンソーの刃を素手で受け止めたのであった。

火花の散るチェーンソーを片手で持つなど正気ではあり得ない……

プリズムナイト「貴様の力……あの黒猫と比べて弱いな……」

マタタビ「え？」

プリズムナイト「ふん！」

マタタビ「ぐほっ！」

プリズムナイトの拳がマタタビの腹にヒットし、マタタビは膝をついてしまった。

プリズムナイト「さて……次はお前達か？」

プリズムナイトはトリコとアトムの方に視線を流したがその時、

ラブチャー「うおおおおお!!!」

プリズムナイト「ん？」

ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！！

ラブチャーが乱入しプリズムナイトに斬りかかった。

だがプリズムナイトそれを払い除けるようにあすかを飛ばした。

プリズムナイト「お前はしつこいぞ……」

ラブチャー「なっ……」

プリズムナイト「プリキュア！スパークルソード！スラッシュ！」

プリズムナイトの剣から巨大な紫色のエネルギーの斬撃をあすかにぶつけた。

ラブチャー「しまった！」

あすかはすこしの油断で駄目だと思ったその時、

トリコ「うおおおおお!!!」

ドオオオオooooooooooooooooon!!!!

トリコが盾となりあすかを庇ったが最後のエネルギーの斬撃が直



撃しようとしたその時、

アトム「ふん！」

アトムが立ち塞がりそれを両手で受け止めた。

だがトリコとの戦闘でひび割れになった両腕はその斬撃に耐えきれず……

ドオオオオーンーン!!!

アトム「ああああっ!!!」

両腕が破壊されたが斬撃はギリギリの間で消えた。

プリズムナイト「ふん……」

勝負はついたというばかりにプリズムナイトは去っていった。

トリコ「おい！大丈夫か？」

プスプス……

アトム「はい……なんとか……」

トリコ「なんでこんなムチャしてんだよ？」

アトム「僕達じゃ……あいつに勝つには出来ない判断したんです……だからあなた達に譲ります」

トリコ「お前……」

マタタビ「おい！ミーしっかりしろ！」

ミー「う……マタタビくん……」

マタタビ「お前……剛があいつに連れ去られたって聞いたけど  
ういうことだ？」

ミー「あの時……僕達が寝ていた時、奴は音に気づかれずにやつて来たんだ。そしたら奴は……剛くんを連れ去ってどこかへ連れていこうとしたんだ……僕はそれに……気づいて奴を倒そうとしたけど……あいつの……強い力に僕じゃ歯がたたなかつた……」

マタタビ「……」

ミー「だから今、奴が現れて僕は剛くんの居場所を吐こうとさせたが……」

マタタビ「振り返ちにあつたのか……（まさかキッドもこの世界に……）」

ミー「マタタビくん……この勝負……君たちの勝ちだ……あの石をとるんだ……」

ミーの言葉にマタタビは無言でブラックストーンをキャッチした。

ラパパ『しゅーーーーりよーーーー!!ロボチームが敗退してガッツ  
チームが勝利!!』

ラパパのKYな歓喜にすこしどんよりとした雰囲気になった。

ミー「マタタビくん……勝て……よ」

アトム「頑張つて……勝ち続けてください」

シューーーーーン……

それだけ言い残し2体は消えていった。

ラプチャー「……」

そこにただ無言で突っ立っているラプチャーはなにも言い返せな  
かった。

ラパパ「たーまれ♪」

ーガッツチーム控え室ー

闘士タロウ「君があの時飛び出して来なければ二人は大ケガせず  
すんだのかも知れないんだぞ!!」

あすか「たとえ私が飛び出して来なくても奴は二人も相手チームも  
殺されていたのかもしれないんだぞ!!」

闘士タロウ「だとしても君が……」

トリコ「まあまあ、俺は平気だから……ここは穩便に……」

闘士タロウ「よくない!!黙ってて!!」

トリコ「はい……」

闘士タロウに指差されてウルトラ戦士ならぬ威圧的な態度でトリ  
コを黙らせた。

あすか「私は元々部外者だ……ここにおいてもお前らの迷惑の妨  
げになるしな……」

麗日「あすかちゃん!」

闘士タロウ「だったら……君には大切な人がいないのか?失い  
たくない人が……」

あすか「失いたくない……人……」

「それがあすかの逆隣に触れたのであった。」

あすか「……………いたよ……………家族も……………友達も……………  
だが……………私のいた世界にはもういない!!」

闘士タロウ「!?」

麗日「!!」

トリコ「!!」

マタタビ「!!」

ルフィ「……………」

あすか「私は魔法少女になってから敵との戦いとこの日常につれ……………  
奴等は私の家族を殺害した……………」

麗日「え!?!」

あすか「私達11人の魔法少女は戦えば戦うほど……………死んでいつ  
た……………二人が死にそしてあの最後の決戦の時は4人も死んだ……………  
そして生き残ったのは私達5人……………」

サッチユウ「あすか……………」

あすか「もう……………私はこれ以上周りが死んでいくような姿は見  
たくないんだよ!?!?!」

バタンツ!!

サツチユウ「あつあすかー!!」

あすかはドアを強引に締めそれを追うようにサツチユウも出ていった。

そしてガッツチームは周りがだんまりとした空気になってしまい麗日は決意したように立ち上がった。

麗日「私!あすかちゃんの所に行く!」

闘士タロウ「え?」

ルフィ「んじや俺も行く!」

トリコ「俺も!」

闘士タロウ「え?ちよつと!」

マタタビ「拙者はすこし外の空気を吸ってくる」

闘士タロウ「えええ!!」

バタン!

4人とも出ていき一人取り残された闘士タロウはすこし心細かった……

闘士タロウ「はあー」

闘士タロウはため息を吐いてしまった。

闘士タロウ（ウルトラ戦士が地球人の少女に怒鳴るのはすこしやりすぎだよな……）

心の中で反省している中画面からラパパが次の対戦チームとのバトルを知らした。

闘士タロウ「え？」

ラパパ『ガッツチーム対武者頑駄無チームの3対3のバトルだああ!!』

闘士タロウ「3対3!？」

闘士タロウは驚いた3対3で出場するのは闘士タロウ、マタタビ、ルフィ、そして武者頑駄無チームには武者ゴツド丸、武者飛駆鳥（ビクトリー）、天翔狩人 摩亜屈（マークツ）であった。

闘士タロウ（今ここにいるのは……僕だけ……連れ戻そうとしても間に合わない……だったら）

闘士タロウ「選手交替！僕一人でやります！」

一方、その頃マタタビは……

マタタビ「この場所のどこかにキッドがいる……」

マタタビはキッドもといクロを探していた。

そしてその一方で……

動物が入れるほどの小さな檻の中で口を塞がれ手錠を掛けられた黒猫がいた。

？「んーんーんー!!」

黒猫は何かを訴えようとしていたがその目の前にいるのは……

ガッ！

プリズムナイト「……………」



そして話が変りあすかは……

廊下を歩き続けるあすかとサツチュウがいた。

サツチュウ「あすか……やっぱりあいつらといたほうがまだ最善のほうだと思うチュー！今ならまだ間に合うかもしれないチュー！」

あすか「やめろ……私は……もう……」

ルフィ「おーい！」

あすかが頭を抱えている時、ルフィが現れた。

あすか「あんたは……」

ルフィ「俺はルフィ！海賊王になる男だ！」

あすか「海賊王つて……」

ルフィ「俺の夢だ！ニヒヒヒ」

ルフィはまっすぐな笑顔をあすかに向けあすかはどんよりとした。

あすか「海賊って……街で金や宝を盗むあれか？」

ルフィ「俺はそんなことしねーし、俺の仲間もそんなことしねー!!」

あすか「そういえばあんたのいる世界にも仲間がいるんだっとな……」

ルフィ「ああ、めっちゃおもしろー奴らばっかだからな！」

あすか「……………」

ルフィ「どうした？」

あすか「この世界で勝ち続ければ願い事が叶うっていうことで……あんたは何を願うんだ？」

あすかはヤル気のない質問をルフィにぶつけたがルフィの答えは……

ルフィ「うーん……………肉1年分！」

あすか「……………は？」

突然の予想外の言葉にあすかは唖然とした。

ルフィ「俺肉好きだから……1年分でもいいや」

あすか「おい！それでいいのか!？」

ルフィ「んあ？」

あすか「お前の夢は海賊王だろ？なのになんで肉1年分なんだよ！海賊王って願えば「駄目だ!!」え？」

あすかの言葉にルフィの真剣な眼差しで黙った。

ルフィ「俺は仲間と一緒に……みんなで海賊王になりてーんだ！もし俺が海賊王になりたいっていう願いを言っちゃったら……俺がこれまでやって来たことは無駄になっちゃう！」

あすか「ルフィ……」

ルフィは頭に被っていた帽子を取りあすかに説明した。

ルフィ「この帽子はシャンクスが俺に預けた物なんだ」

あすか「シャンクス？」

ー この帽子をお前に預ける……いつか必ず返しにこい、立派な海賊になつてな。ー

ルフィ「お前は仲間が次々に死んだっていったが……俺はエースを……兄ちゃんを失ったことで絶望したことがある」

ールフィ、こんな俺を……鬼の血を引くこの俺を……ー

ー愛してくれて……ありがとう……ー

ルフィ「でもそんな俺を目覚めさせたのがジンベエだった」

ー今は辛かろうが……ルフィ!! それらを押し殺せ!! 失なったものばかり数えるな!! 無いものは無い!! 確認せえ!! お主にはまだ残っておるものはなんじゃ!!ー

あすか「それが仲間か？」

ルフィ「うん！」

あすか「……………」

ルフィ「俺は仲間を誰一人無くさないために2年間修行してきた！そして俺は今も仲間を信じている!! 当然、お前も！トリコ達もな……」

ルフィの笑顔にあすかは心のどこかに濁った水が清らかな水になったような気になった。

あすか「……ルフィ」

ルフィ「？」

あすか「私も……お前のように強くなれるかな？」

ルフィ「んー……わかんねえ!!」

あすか「ぷっ……」

サッチユウ「あすか？」

あすかの質問にルフィの適当な答えに吹いてしまった。

あすか「くくくく……いや、すまない……別の世界にはお前みたいな奴がいるんだなと思って」

ルフィ「ん？」

麗日「あすかちゃん!!」

トリコ「おー……い！」

二人を見つけたトリコとお茶子が走ってきた。

麗日「あーやっと見つかったよーもうへとへとだよ」

あすか「お茶子……ごめん」

麗日「あれ？あすかちゃんなんか雰囲気変わった？」

あすか「え？そうか？」

麗日「うん！なんか前より穏やかになったよ」

あすか「穏やかに……」

あすかとお茶子のやり取りにトリコはルフイに質問した。

トリコ「なあ、何があつたんだ？ルフイ」

ルフイ「しししし、わかんねえ！」

ラパパの部屋……

ラパパは魔法使いプリキュアの本を強く握りしめていた。

ラパパ「なるんだ・・・」

t o b e c o n t i n u e d

## 5話 約束 闘士タロウ対武者頑駄無

次のステージは1回戦と同じ廃工場跡地、

そこに立つ闘士タロウ、そして武者ゴツド丸 武者飛駆鳥  
天翔狩人 摩亜屈

ゴツド丸「お前一人か？」

闘士タロウ「・・・はい」

ゴツド丸は不適に笑うとラパパのバトル開始の合図が出た。

ラパパ『レディー！ゴー！』

ゴツド丸「はああっ！」

闘士タロウ「やああ!!」

ガアアンツ!!

ゴツド丸の2刀の太刀と闘士タロウの拳が激突した。

摩亜屈「ふっ！やっ！はっ！」

闘士タロウ「ブレスレットランサー！」

キン！キン！キン！キン！キン！キン！



摩亜屈の二刀流さばきに闘士タロウはキングブレスレットのブレスレットランサーで防ぐことで手いっぱい一旦距離を置こうと引いたが……ゴツド丸の必殺技が炸裂した。

ゴツド丸「熱火！爆輪斬！」

ドオオーン！！

闘士タロウ「ぐああっ！！」

飛駆鳥「閃光翼！全開！」

飛駆鳥の背中に装備されているブーストが展開し闘士タロウに襲いかかってきた。

飛駆鳥「金剛！飛燕竜巻返し！！」

バシユツ！

闘士タロウ「がああっ！」

摩亜屈「はああっ！」

飛駆鳥の必殺技で落ちそうな闘士タロウを摩亜屈が飛び越え2刀を構えた。

摩亜屈「必殺！横一閃！！」

ズバツ！

闘士タロウ「あああつ!!」

摩亜屈の斬激で闘士タロウはドラム缶のある方に吹っ飛ばされた。

ゴツド丸「兄上! 摩亜屈殿! 石を手に入れましょう!」

飛駆鳥「ああ」

摩亜屈「うむ!」

一方、ガッツチーム控え室で戻ってきたルフイ、トリコ、麗日、あすか、サツチュウは闘士タロウと武者頑駄無達と戦っている映像を見て驚いた。

トリコ「げえっ1対3! まじかよ」

麗日「タロウさん……大丈夫やろか?」

サツチュウ「あんだけあすかを叱った奴が一方的にやられるなんていいキミチュウ! ねえ、あすか」

あすか「……………」

サツチュウ「あすか?」

ゴツド丸「はああっ！」

飛駆鳥「はああっ！」

摩亜屈「やああっ！」

バシユツ！　ズバツ！　ザシユツ！

闘士タロウ「ぐああっ!!」

3人の武者頑駄無の斬激で全身に切り傷だらけになってしまった闘士タロウはまだ立ち上がる。

ゴツド丸「まだ立ち上がるか？もう諦めろ！」

闘士タロウ「僕は……諦めない！」

闘士タロウは3人を全力で押し出した。

闘士タロウ「あの人の約束があるかぎり僕は負けない！」

「「があああっ!!」」

闘士タロウによって吹っ飛ばされた武者頑駄無達は立ちあがりその理由を聞いた。

ゴツド丸「ならお前には誰となんの約束をしたんだ」

ゴツド丸の質問に闘士タロウは答える。

闘士タロウ「かつてその人は僕達の星を荒らしていたことがあった。でもそれがその人と戦った人との間に絆が生まれたんです……」

あすか「……………」

ルフィ「……………」

闘士タロウの故郷 光の国はかつてメフィラス星から現れたメフィラス大魔王によって一次は全滅にされかけていた。だが最強の男、闘士ウルトラマンとの死闘でメフィラス大魔王を倒した。だがそのあくる日の大会でメフィラス大魔王が現れた時、当時の闘士タロウはメフィラス大魔王を憎んでいた。だがウルトラの父、そして闘士ウルトラマンとの共闘でメフィラス大魔王の心に光が差し込んだような衝撃が走った。そしてメフィラス大魔王は闘士タロウを弟子とし強敵ヤプールとの決戦前の修行をした。

メフィラス「どうした？それで終わりか？」

闘士タロウ「はあ．．．．はあ．．．．」

メフィラス「闘士マンの全力はお前の倍はあった、貴様の力では闘士マンとてヤプールにも敵わん!!」

闘士タロウ「そ．．．．そんな．．．」

その厳しい修行には闘士タロウはもうやめようと思ったことが度々あつたらしい．．．．

その時、メフィラス大魔王は闘士タロウにある約束をした。

メフィラス「タロウ．．．．お前は俺を倒せるか？」

闘士タロウ「え？」

メフィラス「せっかくあのバカのお陰で今までとは違う面白味を知れたんだ。この気持ちを手放したくない」

闘士タロウ「メフィラスさん．．．．」

メフィラス「俺とていつまた邪悪に歪むかもしれない．．．．だからタロウお前が俺を倒せ．．．．」

闘士タロウ「．．．．．．．．」

メフィラス「倒せるように．．．．強くなっておけ」

ゴツド丸「．．．．」

飛駆鳥「……………」

摩亜屈「……………」

闘士タロウ「でもツイフォンが現れて瀕死状態だったメファイラスさんは決死の覚悟でツイフォンを倒そうとした。でもそれが失敗に終わった。」

トリコ「……………」

麗日「……………」

闘士タロウ「だからもう一度あの人を甦らせてまた一緒に戦いたい……………それが僕の……………願いなんだー!!!」

闘士タロウは頭についているウルトラホーンが金色にひかり、その角の長さが伸びていった。

闘士タロウ「はあっ!」

ゴツド丸「空中に!」

飛駆鳥「ここは俺が!」

ゴツド丸「兄上」

飛駆鳥「天来変幻!!」

武者 飛駆鳥が光だし金の羽衣を纏った形態に変わった。

飛駆鳥「はあああっ!!」

闘士タロウ「でやあああっ!!!」

空中戦で激しい攻防を繰り返す両者、武者 飛駆鳥は一気に止めをさそうとした。

飛駆鳥「これで終わりだ!翼心一刀!流星津波返し!!」

闘士タロウ「だったら、ブレスレットスラッシュ!」

闘士タロウはブレスレットランサーを二本に分離させそれを剣のように攻撃を炸裂させた。

飛駆鳥「なにっ!」

闘士タロウ「はああっ!!」

ハジユツ!

飛駆鳥「ぐあああっ!」

ゴツド丸「兄上!」

空中戦で勝利したのは闘士タロウであった。

ゴツド丸「爆熱の陣！必殺！熱火爆輪斬！」

闘士タロウ「シューティングビーム！」

ドオオーーン！！

ゴツド丸「石破天驚剣！！」

ガキイーン！！

闘士タロウ「はあああつ！」

2刀の太刀を一つにした石破天驚剣で闘士タロウに斬りかかったがそれを闘士タロウは拳で弾き返された。

ゴツド丸「鳳炎水凰斬！！」

闘士タロウ「アトミックパンチ！！」

ドオオオオーーン！！

ゴツド丸「うわああ！！」

摩亜屈「はあああつ！！」

闘士タロウ「はあああ！」



ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！  
！  
摩亜屈の2刀の太刀を手で跳ね返し闘士タロウは思いっきりジャンプした。

闘士タロウ「てやあ！」

ドン！

摩亜屈「グハッ！」

闘士タロウ「はあっ！」

バンツ！

摩亜屈「があっ！」

闘士タロウ「必殺！スワローキック！」

ドオン！！

摩亜屈「ぐああっ！」

ゴツド丸「摩亜屈殿！！」

闘士タロウ「これで最後だ！！」

闘士タロウは両腕を高く上げそれを溜め込むように下に下した。

これが超闘士タロウが放つ最強の必殺技

闘士タロウ「ストリウム超光破!!」

ビイイイイイー  
!!!!!!

「ぐわああああ!!!」

ドオオオー  
!!!!

ストリウム超光破を食らった武者頑駄無達は3人とも戦闘不能になった。

闘士タロウ「はあ……はあ……はあ……はあ、また一步近づけた……」

闘士タロウはブラックストーンを手に取りラパパの終了の合図が響いた。

ラパパ『ウイナー!!勝ったのはガッツチーム!!』

麗日「やったあ!タロウさん」

ルフィ「あいつ!決行やるな!」

あすか「けどボロボロだな」

トリコ「俺が迎えにいつてくるぜ」

トリコは控え室から出て闘士タロウを迎えに行った。

ゴツド丸「お前も俺達のように守るべき者がいるんだな」

闘士タロウ「え？」

ゴツド丸「俺達、武者頑駄無には武者魂と呼ばれる物がある。仲間と育むことでそれを生かし悪しき者たちを倒していった。」

飛駆鳥「子供の頃はよく父上に叱られてその力の意味を示され俺は  
大將軍になったんだ」

摩亜屈「我々はどんなことがあっても戦い、協力し、共に勝利を手  
にした。」

ゴツド丸「その源になっていたのは俺達がこれまで出会った仲間、  
そして……」

ゴツド丸は超將軍の一人、爆流頑駄無、そして兄の飛駆鳥とともに  
戦った大鋼、そして人間界 ペガサスの国で出会った恩人 ナツミ

飛駆鳥は父上である新星大將軍、じいの轟天頑駄無、超將軍達

摩亜屈ことエウーゴは死んだ兄、かつて敵対となった次兄、テイ

ターン

ゴツド丸「お前もその力と約束を信じれば、たどり着く道が開く」

闘士タロウ「みなさん……ありがとうございます」

ゴツド丸「じゃあな」

その言葉とともに武者頑駄無達は元の世界へと帰っていった。

闘士タロウ「力と約束を信じれば、たどり着く道が開く……か」

その言葉を胸に闘士タロウはさらに上へと成長した。

トリコ「よつと、待ってるよー」

トリコは控え室から出て闘士タロウを迎えに行こうとしたその時、

プリズムナイト「貴様か……強き者は……」

トリコ「お前は!？」

プリズムナイト「ふっ！」

t o b e c o n t i n u e d

## 6話 正体 あすか&ルファイ対プリズムナイト

武者頑駄無との戦いを終えた闘士タロウは控え室から戻ってきた。

闘士タロウ「ただいま……」

あまりのダメージでもうヘトヘトであった。

麗日「タロウさんお帰りなさい！」

ルファイ「タロウ！おめえスツゲーな！最初も凄かったけどあんなデケービームもスツゲー！なあ！なあ！もう一回出してくれよお!!」

ルファイはあまりの興奮状態で目がキラキラしていて、タロウはもう座ることではいっぱいだった。

闘士タロウ「……」

あすか「……」

闘士タロウはあの時、彼女を説教したことですこしぎこちない感じで黙ってしまった。

あすか「宇宙人にも大切な存在っているんだな」

闘士タロウ「……え？」

あすか「……」チラ

麗日「はあ……」

ルフィ「ししし！」

どうやら、仲直りしたらしいと感じた二人であった。

麗日「あれ？　そういえばトリコさんは？　一緒じゃなかったの？」

闘士タロウ「トリコ？　いや知らないよ」

トリコと一緒に戻ってきたと思っていたが闘士タロウはトリコと  
出会わず一人で戻ってきたらしい……

ではトリコはどこに？

ラパパ『はいはい！　準々決勝残り2チーム！』

映し出された映像はキックチームのサンジ　飯田ことインゲニウ  
ム　クールチーム　クラウド　うちはサスケ

お茶子「ああ！　飯田くん！」

ラパパ『そしてここでワイルドカードを投入！』

そこにプリズムナイトの映像が映された。

あすか「あいつは！」

あすかはプリズムナイトを見た時、血相を変えて出ていった。

お茶子「あすかちゃん！」

ルフィ「俺が行ってくる！」

あすかの跡を追うようにルフィが駆けつけた。

一方、マタタビはキッド（クロ）を探すために地下まで来た。

マタタビ「とうとう、地下まで来ちまったが本が多いな」

周りは全部本が置かれていてマタタビは何かこの世界に関する情報を探索した。

マタタビ「ん？」

マタタビは机の上で開いた状態の本が置いてあった。

マタタビ「あいつ……なんでこんなに別の世界の奴等のことを検索してんだ？」



その本にはワンピース、NARUTO、ヒロアカ、fate、ストライクウィッチーズ、ワンパンマンなどの情報が掲載されていた。

マタタビ「本の裏に何かがあるな……」

マタタビは本を退かすとそこにあつたのは

マタタビ「魔法つかいプリキュア計画……まさかあいつ……」

マタタビの後ろに近づく陰……果たして。

サンジ「どうりやああ!!」

サスケ「千鳥!」

サンジの炎を纏った足 悪魔風の脚ディアブルジャンプとサスケの千鳥が火花を散らし

インゲニウム「はああっ!!」

クラウド「ふんっ!!」

インゲニウムこと飯田天哉の個性 エンジンのレシプロバーストとクラウドのバスターソードの対決が激しかった。

それを壊すかのようにプリズムナイトが現れた。

プリズムナイト「我が名はプリズムナイト! 強きものと戦う戦士  
!」

クラウド「やっと来たか……」

サスケ「お前がここに来るのを待っていたんだ」

プリズムナイト「ならば来い!」

クラウドとサスケはプリズムナイトに戦いを挑んだ。

インゲニウム「我々も行きましょう! さ……」

インゲニウムも加勢しに行こうとしたがサンジは

サンジ「はあく〜プリズムナイトちゅわ〜ん」

女性には弱いためサンジはプリズムナイトが女性だということに  
使い物にならない状態であった。

インゲニウム「ちよつと！サンジさん！しっかりしてください！サ  
ンジさん！」

インゲニウムはサンジを奮い立たせたがびくともしない。

プリズムナイト「ふん！」

ザシュツ！

「ぐわあああつ!!」

プリズムナイトの斬撃がクラウドとサスケを吹っ飛ばした。

インゲニウム「黙って見てられん！俺も加勢する!!」

インゲニウムはサンジをほったらかしてエンジン全開にしてプリ  
ズムナイトに挑んだ。

インゲニウム「はあああああああああ!!!」

プリズムナイト「？」

インゲニウム「レシプロバーリーストローーー!!!」

インゲニウムの全力全開のキックがプリズムナイトに炸裂した

ガンっ！

と思いきや……

プリズムナイト「その程度か……ふんっ!!」

盾でガードされ剣で吹っ飛ばされた!!

インゲニウム「かあああああっ!!はっ！」

インゲニウムは吹っ飛ばされた直後、目の前のブラックストーンをキヤッチした。

ラパパ『おおおーー!!キックチーム勝利!!』

ラパパの勝利宣言が報道されキックチームは待機室、そしてクールチームは元の世界へと戻った。

誰もいなくなったことに用はないと悟ったプリズムナイトは去ろうとした瞬間！

ラプチャー「待て!!」

後ろからラプチャーあすかが現れプリズムナイトは振り向いた。

プリズムナイト「お前はこの私に負けた奴だ。興味もない……」

ルフィ「待て!!」

ラプチャー「ルフィ!」

その時、駆けつけたルフィが現れた。

ルフィ「あいつがプリズムナイトか……だったら俺も戦う!!」

ルフィを拳を構えてプリズムナイトを睨んだ。

ラプチャー「……………」くす

ルフィ「んあ?どうした?」

ラプチャー「いや、なんでもない……行くぞ!ルフィ!」

ルフィ「おう！」

プリズムナイト「来い！」

ラプチャー「ラプチャータロン！」

プリズムナイト「ふん！」

ガンっ！ガンっ！ガンっ！ガンっ！

ラプチャーのタロンとプリズムナイトの剣が火花が散る激闘を増していた。

ルフィ「ギア2！」

その時、ルフィの体から蒸気が発生し体質も赤くなった。

ルフィ「ゴムゴムの……」

ラプチャー「ふんっ！ほっ！ルフィ！」

プリズムナイト「!？」

ルフィ「JETピストル！」ドンツ！！

プリズムナイト「クッ！」

ガンッ!! ガンッ!!

シュウウウウ・・・

ピシッ!

プリズムナイトの盾がルフィのJETピストルの威力に耐えられなかったためヒビが生じた。

これを期にラプチャーは魔力強めの攻撃を炸裂した。

ラプチャー「くらえっ!! はああああ!!」

バリーイーーーン!!

プリズムナイト「なっ!!」

盾を無くし、剣だけになってしまったプリズムナイトはなす術もなくなつた。

ルフィ「シュウウウウ・・・」

ラプチャー「ルフィ?」





ルフィ「いちっ！」

プリズムナイトが放った拳が10発の衝撃波がルフィの拳にダメージを送ったが、ルフィはそれを気にせず一気にプリズムナイトを押し出した。

ルフィ「うおおおおおおおおお！！！！」

プリズムナイト「我が名はプリズムナイトおおおおお！！！！」

ドオオオオーーーーー！！！！

ルフィのエレファントガンでプリズムナイトを壁まで激突させて爆発した。

ラプチャー「ルフィ！」

ルフィ「へーへーへー……あすか」

ラプチャー「やったのか？」

ラプチャーはルフィのエレファントガンによってめり込んだ壁の下に倒れこむプリズムナイト……だが立ちあがり……

カランツ

兜が脱げた。

ルフィ「ああ!!」

ラプチャー「お前は……」

ルフィ、ラプチャーがみたプリズムナイトの正体は……

トリコ「……」

トリコだった……

t o b e c o n t i n u e d

? 「ふんっ！」

キュアロイド 「ギイイ!!」

ドオオoooooooooo!!

モツプル 「よっしや! 全員倒したあー!!」

青年によってなん十体もいたキュアロイドをたったの一人背中の背負っていた剣を使わずに拳で叩きのめしたのであった。

モツプル 「さっ! 早いところゲットしようぜ」

青年はスピリットフィギュアに手を出そうとしたその時、

? 「フニャアアアアア!!」

? 「ニャアアアアア!!」

? 「フッ!」

モツプル 「なっなんだ?」

突然、青年の後ろから猫のような怪人が2体も出現した。

モツプル「あれは……!?」

? 「仮面ライダーアマゾンの黒猫獣人、仮面ライダーBLACKの黒猫怪人！」

? 「悪いけど……それは私が頂く」

? 「!!」

2匹の黒猫の怪人を従わせているのは髪はショートで灰色で目の瞳は緑の10代の少女であった。

? 「そのマーク噂のゼロフォウルの奴か……」

? 「そうよ……」

? 「何者だ！」

その少女の名は……

? 「スラツシュ……」

続く

## 7話 異変への探索

ルフィとラプチャーの戦いでプリズムナイトを倒すことに成功したのだが……

プリズムナイトの正体が……

ラプチャー「何!？」

ルフィ「トリコ!？」

プリズムナイトの正体がなんと同じチームのトリコであった。

トリコ「……」

だがトリコの表情は感情がなく。まるで操り人形のようなだった。

トリコ「ふんっ!」

ルフィ「え?」

ラプチャー「なっ!」

ドオオooooooooon!!

ルフィ「ぐああつ!!」

ラプチャー「ああっ！」

トリコの持っているプリズムナイトの剣でルファイ達に斬撃の攻撃を炸裂させた。

トリコ「……………」

トリコはルファイ達が倒されたことを確認しどこかへ去っていった。

カツカツカツ……………

マタタビ「……………」スツ

？「……………」ブオン

殺気を感じたマタタビはマントからブーメランを取り出し、それに近づくものは右腕に装着している青いブレスレットから光の剣を出した。

マタタビ「……………」

?「……………」

「ふっ!!」

マタタビと相対したその正体は青い体に尖った耳、そして白い複眼……………」

闘士ヒカリ「君は……………闘士タロウと一緒にいた」

マタタビ「おぬしは……………」

その正体は闘士タロウと同じ世界のウルトラ戦士、闘士ウルトラマンヒカリだった。

闘士ヒカリはナイトブレスのナイトビームブレードを解除し自己紹介をした。

闘士ヒカリ「私の名は闘士ウルトラマンヒカリ、闘士タロウと同じ世界からやって来た科学者だ」

マタタビ「拙者はマタタビ……………その科学者が一人で来ることは物好きだな。」



闘士ヒカリ「いや正確には……3人だ」

闘士ヒカリは天井を見上げるとそこから2つの影がマタタビと闘士ヒカリの前に着地した。

？「いやーまさか気づいていたなんてね……」

？「さすが宇宙人って奴ですね……」

闘士ヒカリ「君達は確か忍者チームの……」

？「はたけカカシ、よろしく」

？「山田利吉です。」

シ  
NARUTOの世界の6代目火影、写輪眼のカカシことはたけカカシ

忍たま乱太郎の世界の忍術学園、山田伝蔵の息子 山田利吉である。

マタタビ「お主達……どうやら大会目的で来たわけじゃないらしいな……」

闘士ヒカリ「ああ、この世界エンドはかつてある戦士を封印した何もない星だったんだ……だがこの星に異変が生じ私はその調査に

来たんだ」

カカシ「俺達はそのラパパとかいうお嬢ちゃんから受け取ったカードを受け取ってここに来たんだが……」

利吉「何か邪悪な気配を感じ僕達はわざとリタイアし、元の世界に戻る前に分身で入れ替わりを作りこの大会の裏を探るため調査をしているところだ」

マタタビ「闘士ヒカリ、この世界はある戦士を封印するための何もない世界っていうがそのある戦士とは何者なのだ？」

闘士ヒカリ「うむ……これはあくまで歴史の闇の話だが……」

マタタビ「歴史の闇？」

闘士ヒカリ「かつて邪神プリキュウスの娘イングスには妹がいたという話だ。彼女の力はプリキュアの力を破壊する力を持ち、彼女は敵味方、仲間を持つことを嫌い、自分自身が最強だと決めつけ姉であるイングスに戦いを挑んだが結果、負けた……そしてプリキュウスは彼女をこの世界に封印し、人知れず忘れ去っていったということだ」

カカシ「でも何もないのにこんなのがあんなんでね」

利吉「僕達のことを調べるために情報網があんなにあるとは普通じゃありえない……」

マタタビ「あのラパパとかいう女……なんか裏がありそうだな」

一方、控え室では……

二人となった闘士タロウとお茶子、仲間が散り散りとなって、ため息をばく闘士タロウ……

闘士タロウ「トリコ……どこにいつちやたんだろう」

お茶子「どっかのチームと意気投合しちゃったとか」

闘士タロウ「それはありえないかも……」

お茶子「あすかちゃん……ルフィさんと一緒にいったけど大丈夫かな？」

サツチュウ「心配ないチュウ！あすかは魔法少女の中では一番強いチュウ！」

闘士タロウ「だといいけどね……」

ラパパ『はーい！ たった今から準決勝を始めたいと思いますーす！』

闘士タロウ「あっ！」

画面モニターからラパパが現れた。

ラパパ『Bブロックはキックチーム、動物チーム、お年寄りチームのバトルロワイアル!! キックチーム対お年寄りチーム対動物チームの二人一組のバトルを執り行いまーす！ そしてみんなはもう・・・えっと・・・あれ・・・あつ強いのにやられちゃったけどストーンを手に入れてるのでセーフ！ セーフ♪』

闘士タロウ「チームのバトルロワイアル！」

お茶子「なんか滅茶苦茶になってる気がする」

サツチュウ「・・・チュウ」

キックチーム インゲニウム リゾット

お年寄りチーム 一龍 次郎

動物チーム イギー チョッパ

ラパパ『レディー！ ゴー♪ ゴー♪ ゴー♪』

インゲニウム「はあっ！」

一龍「ふんっ！」

リゾット「108マシンガン!!」

チョップパー「柔力強化（カンフーポイント）！ホワチャア!!」

イギー「ワウウ!!（ザツフル）」

次郎「ノツキングスクリュー!!」

3チームによるブラックストーンを巡るバトルロワイアルが始まった。

一方、異変の探索を行って机の上を漁るマタタビ 闘士ヒカリ カシ 利吉

そこでマタタビはある書かれた紙を手に入れそこにはこう書いてあった。

マタタビ「魔法つかい……プリキュア計画？」

カカシ「どうやら……これが彼女の目的らしいな……」

カカシは頷きマタタビはあるワードに？が浮かんだ。

マタタビ「なんだ？その『ぷりきゅあ』とかいう訳のわからん日本語は」

闘士ヒカリ「君達の世界にはプリキュアによる侵略はなかったらしいな」

マタタビ「？」

カカシ「プリキュアっていうのは二人、あるいは5人とかでチームを組んで悪いやつらから守るいわば正義のみかたってやつだよ」

利吉「それが今や50人以上」

マタタビ「50人って!?どんだけその世界狙われているんだよ？」

闘士ヒカリ「だが今はそうじゃない」

マタタビ「なんで？」

闘士ヒカリ「さつきも話したとおりプリキュアは正義のために戦ったが結局は嘘であり本当は邪神プリキュウスを甦らせるためのヒーローごっこに過ぎなかった。今はプリキュアは世界を脅かす怪物と特定されている」

マタタビ「プリキュア……」

闘士ヒカリの説明にマタタビはだまりこんでしまった。

? 「ギギイー!!」

「!!」

その時、彼らの前に現れたのはプリキュアを模したプリキュア型ロボット キュアロイドが現れた。

闘士ヒカリ「こいつらは!」

白ゼツ「あああー……」

グリム「ガアアア!!」

量産型ホムンクルス「あ……ああ……」

NARUTOの世界の白ゼツ RWBYの世界のグリム、そして鋼の錬金術師の量産型ホームクルスマでもが現れた。

マタタビ「この大会にはどうやら裏がありそうだな！」

カカシ「ここは俺と利吉君で食い止める！あなたと一匹はこのことを知らせるんだ！」

利吉「頼みましたよ！」

カカシと利吉が大量の敵相手に向かい合い。闘士ヒカリは頷いてマタタビと一緒に一時退散した。

闘士ヒカリ「すまない！必ず戻る！」

マタタビと闘士ヒカリはルフイ達のいる控え室に向かった。

その一方でプリズムナイトの剣を握りしめたトリコは力を込めると周りから無数の光が集結しトリコのほうに集まった。



パアアアア……

プリズムナイト「……………」

無数の光がトリコの体に張り巡りプリズムナイトへと変わった。

? 「てめえ……………」

小さな檻の中でプリズムナイトをにらみ返す一匹の猫

一方、圧倒的に有利に圧しているのはキックチーム、いよいよ決着が付き添うな感じだった。

リゾット「キングダムセイバー!!」

一龍「うおっ！」

次郎「ぬっ！」

リゾット「はあああつ!!」

チョッパ―「うわああつ!?!」

イギー「ちっ！」

リゾット「今だ!!」

インゲニウム「ああ！レシプロターターボ!!」

ドオオオオオオオオオオオー~~~~~  
!!!!!!!

リゾットの放つ光の剣 キングダムセイバーで2チームを翻弄させ、それを一気にインゲニウムの必殺技レシプロターボで一気にスローンの方までダッシュした。

インゲニウム「はあああ!!!」ガシツ!

ラパパ『おおお!!勝者!!キックチーム!!』

インゲニウム「プリズムナイトは俺達に任せてください！」

一龍「頼んだぞ！」

お年寄りチームと動物チームは元の世界へと戻っていった。

リゾット「よしこれで決勝進出だ！」

二人は手の平のブラックストーンを眺めた。

その時、ラパパが現れ杖を二人に向けた。

ラパパ「二人ともお疲れ様♪もういいですよ♪えい♪」

リゾット「え？」

インゲニウム「なっ？」

ラパパが杖を振るとインゲニウムとリゾットが元の世界へと戻らせてしまった。

ラパパ「ふーっ……いい感じ……」

ラパパは地面に落としたブラックストーンを拾い上げ不適に笑った。

ラパパ「願いが叶った時のみんなの顔……楽しみだなく♪」

一方、カカシと利吉はキュアロイドなどの量産型を蹴散らしさらに地下へと移動していた。

その時、彼らはある物を目撃した。

ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！

カカシ「これは……」

ガシャン！ガシャン！ガシャン！ガシャン！

「!?」

プリズムナイト「我が名はプリズムナイト、強きものと戦う戦士……」

後ろから現れたプリズムナイトがカカシと利吉に襲いかかる。

その一方では地下で魔法つかいプリキュア計画を知ったマタタビと闘士ヒカリ、それを、知らせるべく廊下を走っていた。

マタタビ「ん? ……おい! あれ?」

闘士ヒカリ「あれは!」

廊下で倒れていたルフィとあすかがいた。

ルフィ「……………」

あすか「……………」

闘士ヒカリ「ふん！」

闘士ヒカリは二人を担ぎ上げ、一緒にガッツチームの控え室に向かった。

控え室に戻ったマタタビそして二人を担ぎ上げた闘士ヒカリはこの大会の秘密を闘士タロウに話した。

闘士タロウ「え？プリズムナイトの正体がトリコ？」

あすか「ああ、あれは間違いなくあの男だった」

麗日「え？それじゃプリズムナイトの正体ってトリコさんなの？」

ルフィ「いや、トリコは2回戦の時にプリズムナイトと対立している」

2回戦、トリコとマタタビそしてロボチームと戦った時にプリズムナイトが現れたことを思い出す。

あすか「それに・・・私がはじめて奴と戦った時に別の奴と戦っているような気がした」

あすかははじめてプリズムナイトと戦ったことを思い出す。

麗日「じゃあ、鎧を着てた人はどうなっちゃうの？もう使わなくなつてどこかに捨てられたりとか・・・」

お茶子は不安そうに質問した。

闘士タロウ「それは多分・・・そんなことはないんじゃないかな・・・」

闘士ヒカリ「兎に角この世界でブラックストーンを使ってよからぬことを悪用しようとする者がいる。それをたった今カカシと利吉が調査してくれている」

マタタビ「それに拙者の持ってきたこれも気になるしな」

マタタビはあの部屋にあった魔法つかいプリキュア計画の紙を広げた。

あすか「これは……」

マタタビ「どうやらあの女はこの計画で拙者達をおびき寄せて戦わせているんじゃないか？」

闘士ヒカリ「よし！我々が今やるべきことはこの大会に出没するプリズムナイトの倒すことだけに考えよう」

ルフィ「そしてトリコも取り戻す!!」

ルフィは手を下に出すと皆も手を乗せた。

麗日「あすかちゃんも」



あすか「……」スツ

ルフィ、闘士タロウ、闘士ヒカリ、マタタビ、麗日、あすか、サツ  
チュウは手を乗せ合い誓った。

ルフィ「俺達はプリズムナイトを倒しトリコを救う！」

ルフィ「そしてこの大会で優勝して肉を食いまくる!!」

ズゴロー!!

ルフィの予想もしない言葉にずっこけてしまう。

あすか「まだ諦めていなかったのか!？」

ルフィ「ん? うん! 俺肉好きだし!」

マタタビ「拙者も後で分けてくれないか?」

ルフィ「うん! いいぞ!」

あすか「そんなのどーでもいいだろ!!」

麗日「あすかちゃん!」

闘士ヒカリ 「はははははははは！」

闘士ヒカリは闘士タロウと一緒にいる彼らを見て思わず笑ってしまった。

その時、

ラパパ『はーい♪ここで準決勝！2回戦を始めたかと思いまーす♪』

ガッツチームVS剣士チーム

麗日お茶子（ウラビテイ）VS闘士ヒカリ

闘士タロウ「え？」

あすか「準決勝の相手がお茶子と闘士ヒカリだと!？」

マタタビ「あの女……」

ラパパのやり方に不満を抱くマタタビ

麗日「ヒカリさん……」

お茶子は心配そうに闘士ヒカリを見たが闘士ヒカリはほくそ笑み躊躇いもなくに言つた

闘士ヒカリ「この際だ……フェアな戦いでいこうじゃないか」

そして始まる麗日と闘士ヒカリの戦い

t o b e c o n t i n u e d

## 8話 私の本気！ウラビティ対闘士ヒカリ

準決勝で戦う相手はガッツチーム 麗日 お茶子ことウラビティ、そして剣士チーム 光の国の科学者 闘士ウルトラマンヒカリである。

戦うステージは闘士タロウと武者頑駄無が戦った廃工場跡地である。

闘士ヒカリ 「ツルギモード!!」

闘士ヒカリの両肩の角が顔に装着された。

そしてお茶子はヒーロー名ウラビティとして戦うことになった。

ラパパ 『レディゴー!!』

闘士ヒカリ 「ふっ！」

闘士ヒカリは右腕に装着されているGナイトビームブレードを発しウラビティに斬りかかった。

ウラビティ 「あぶなっ！」

闘士ヒカリのスピーディーな剣さばきがウラビティに襲いかかる。

闘士ヒカリ「ふん！せい！」

Gビームブレードの剣のスピードが徐々にアップしウラビティは回避することに必死だった。

一方で控え室でウラビティと闘士ヒカリの戦いを見ているルフィ、闘士タロウ、マタタビ、あすか、サッチュウ

闘士タロウ「ねえ、みんなもし僕達の叶えたい願いが誰かに踏みにじられたってことになったらどうする？」

闘士タロウの問いに一同は黙りこんだが最初に口を出したのはマタタビであった。

マタタビ「そんなこと知るわけないだろ」

闘士タロウ「プリズムナイトのこともそうだけとお茶子ちゃんが願いを叶えるために必死に戦っているのはわかる……それは僕も同じだ……だから「拙者は甘つちよろい言葉はいわねえ……」？」

マタタビ「だが怒りをぶつけるときは……手伝ってやる」

闘士タロウは頬笑みそれを見ていたルフィもあすかも同意見だっ

た。

闘士ヒカリ「ふっ！はあっ！」

ウラビティ「ふう!!」

ウラビティの個性は無重力（ゼログラビティ）彼女が触れた物を両手の指をくつつけることで発動する。彼女は廃工場跡地の鉄屑に手を触れそれを弾丸のように解除した。

ウラビティ「やあっ!!」

闘士ヒカリ「はあっ!!」

だが闘士ヒカリの剣さばきは光の国随一であり、弾丸のように飛ばした鉄屑は次々と切り裂かれた。

だがこれはあくまでプリズムナイトをおびき寄せるための作戦であつた。

控え室にて

お茶子「ヒカリさんが業と負ける?」

闘士ヒカリ「そうだ！君が圧倒的な強さを見せれば奴は現れる」

闘士ヒカリの提案に闘士タロウは質問する。

闘士タロウ「プリズムナイトをおびき寄せるために？」

闘士ヒカリ「ああ……」

闘士ヒカリは答え、お茶子はその提案に不安を感じた。

お茶子「でもだったらウチが負ければ……」

闘士ヒカリ「それはダメだ！私は潜入操作のためにここに来た……だが君には大事な願いがあるだろう？それを犠牲にするわけにはいかない」

お茶子「ヒカリさん……」

闘士ヒカリはお茶子の頭を撫でやさしく語る。

闘士ヒカリ「君の強さを全力で私にぶつけてくるんだ！すこしでも反撃すれば私も反撃する！だから手加減だけは絶対するな」

それが今のこの戦いである。

闘士ヒカリ「ふん！たあっ！」

ウラビティ「うりやあああ!!」

ドンツ！

闘士ヒカリ「うわああっ!!」

闘士ヒカリの剣の攻撃に隙が生じウラビティは両手で闘士ヒカリのボディを押しした。

ウラビティ「はあ……はあ……ウチの本気をぶつけます!!」

ウラビティは雄英の職場体験で習得したバトルヒーローガンヘッドのマーシャルアーツが発揮した。

ウラビティ「はあっ!!」

闘士ヒカリ「ふんっ！」

闘士ヒカリの剣を素早くかわし闘士ヒカリの膝を蹴りそれをウラビティの体を闘士ヒカリの頭に乗しそれを素早く回転して投げ飛ばす。これがウラビティことお茶子のGMA（ガンヘッド・マーシャルアーツ）

闘士ヒカリ「ぐわあっ!!」



ウラビテイ「うしっ！」

ウラビテイはガンヘツドの格闘術が役に立ったことに喜び投げ飛ばされた闘士ヒカリは体制を建て直しビームブレードを解除し肉弾戦に切り替わった。

闘士ヒカリ「はああっ!!」

ウラビテイ「うりやああ!!」

バキッ！ ドカッ！ ガッ！

両方のパンチ 蹴り、手刀などの攻撃を防いでいく。

それを攻撃している闘士ヒカリはウラビテイの底知れぬ力に驚いていた。

闘士ヒカリ「正直驚いている……君の力がこれほどとは……」

闘士ヒカリはウラビテイの真剣な目を見てあえて質問した。

闘士ヒカリ「一体どれ程の願いのためにこの力が出せる？」

そしてウラビテイは答えた。

ウラビテイ「仲間！」

闘士ヒカリ「!!」

ウラビティ「ウチの元の世界には必死でヒーロー目指しているみんながいる！デクくん！爆豪くん！飯田くん！轟くん！切嶋くん！梅雨ちゃん！次郎ちゃん！八百万ちゃん！みんなは必死でヒーローを目指して切磋琢磨して頑張っている！ウチの父ちゃん、母ちゃんも私が自分になりたいものになったときが嬉しいって言われてウチも頑張れる！それだけやない！今のチーム！ルフィさん！トリコさん！タロウさん！マタタビくん！あすかちゃん！それにサツチュウちゃん！」

闘士ヒカリ「なるほど君は元いた世界、そして今チームにいる彼らのために戦う・・・それが君の願いか？」

ウラビティ「それだけでいい・・・それだけでウチはデクくんのように困っている人を助け出すヒーロー、それがウチの願いやー！！！！」

ウラビティは全力全開で闘士ヒカリを圧倒した。

闘士ヒカリ「ならばここで君の願いを切り裂くー！」

闘士ヒカリはGビームブレードを発動しようとした次の瞬間！

ウラビティ「今や!!」

ウラビティは両手をくっつけ無重力の個性を発動そしてウラビティが触れた部分は何と!!

闘士ヒカリ「何!？」

闘士ヒカリの鋼鉄鎧メタルブレストであった。それが今闘士ヒカリの真上に浮いていた。

ウラビティ「解除!!」

ウラビティの解除の言葉で闘士ヒカリのメタルブレストが落下した。

闘士ヒカリ「ぐああああっ!!」

それを控え室で見っていた一同は

ルフィ「おおお!!」

闘士タロウ「すごい!お茶子ちゃん!!」

あすか「お茶子……」

サツチュウ「ガンガンいけっチュウ!!」

マタタビ「決まるな……」

闘士ヒカリ「ぐ……」

落下したメタルブレストの攻撃で大ダメージを食らった闘士ヒカリ

ウラビティ「これで決めたる!!はああああ!!」

ウラビティは最後の力を振り絞って闘士ヒカリのほうに突進してくる。

闘士ヒカリ「ならば……ナイトシユート!!」

闘士ヒカリはナイトブレスを上に掲げ蒼と黄色の稲妻がナイトブレスに集中しそれを左腕にセットし、それを両腕を十字にし虹色の光線が発射された!

ウラビティ「くうっ!!」

ウラビティはナイトシュートのギリギリ、ヘルメットが焼け焦げそれ外し猛突進で闘士ヒカりに止めを刺した!!

ウラビティ「ガンヘッド! ローリングソバット!!」

ドガツ!!

闘士ヒカリ「ぐはあああつ!!」

ウラビティの全力全開のローリングソバットが闘士ヒカリのボディに炸裂し吹っ飛んだ。

ドオオオooooooooon!!!

ウラビティ「ヒカリさん!」

倒れてしまったヒカ리를駆けつけたウラビティは心配する。

ウラビティ「ごめんなさい! ウチやりすぎてしもうた」

闘士ヒカリ「いや・・・流石だよ・・・」

闘士ヒカ리는無事なことにウラビティことお茶子はホツとした。

闘士ヒカリ「後は……頼んだぞ！」

お茶子は涙ぐんだがそれをブルブルと首を振りお茶子はブラックストーンをつかみとった。

ラパパ『ウイナー！ガッツチーム！ウラビティちゃん♪』

闘士ヒカリ「……」コクン

闘士ヒカリそして剣士チームはここで敗退し元の世界に戻った。

お茶子「ヒカリさん……ウチ頑張ります！」

お茶子は次の戦いのために胸を張った。

ラパパ「ガッツチーム！決勝進出おめでとう！」

ラパパはあまりの嬉しさに思わず拍手をした……

だが……

ラパパ「でも……ストーンも集まったし……バカな奴等のお陰で……私は……プリキュアになれる！」

ラパパは悪魔のような笑みを出しとうとう本性を現したのであった。

t o b e c o n t i n u e d

9話 決着！ルファイ！あすか！マタタビ！闘士タロウ！

闘士ヒカリとの闘いを終えたお茶子は控え室に戻ろうとしたその時、プリズムナイトが現れお茶子を奇襲した。

お茶子「プリズムナイト！」

プリズムナイト「我が名はプリズムナイト、強き者と戦う戦士」

プリズムナイトは剣を構えお茶子に襲いかかった。

プリズムナイト「勝負！」

お茶子は闘士ヒカリとの戦いで体力が消耗して戦う力は残っていない。

もうダメだと思ったその時、

ルファイ「ゴムゴムのJETピストル！」ドンツ！

プリズムナイト「むっ！」ガンツ！

マタタビ「ふっ！」ヒュンヒュン！



プリズムナイト「むっ！」キンッ！

闘士タロウ「はあっ！」

ラプチャー「やあっ！」

ガスッ！　ボスッ！

プリズムナイト「ぐあっ!？」

現れたルフィ、闘士タロウ、マタタビ、ラプチャーが現れプリズムナイトに先制攻撃を仕掛けた。

お茶子「みんな!!」

お茶子はみんなが来てくれたことに思わず涙が出た。

ラプチャー「お茶子頑張ったな。後は任せろ！」

お茶子「うん！」

ルフィ「よっしゃ！行くぜ！」

「「おう!!」「」

プリズムナイト「来い！」

最初にラプチャーがラプチャータロンで攻撃を仕掛ける

プリズムナイト「ふんっ！たあっ！」

プリズムナイトの斬撃がラプチャーに襲いかかるがラプチャーはそれを素早くかわした。

プリズムナイト「何!？」

ラプチャー「はあっ!!」ザシユツ！

プリズムナイト「ぐわっ！」

ラプチャータロンでプリズムナイトの体を斬りつけることに成功した。

マタタビ「ふんっ！」チュイイイイイイン!!!!

プリズムナイト「くっ！」

マタタビのチェーンソーでプリズムナイトに斬りつけるがプリズムナイトは盾でチェーンソーの攻撃を防いだ。だがそれがプリズムナイトの間であった。

マタタビ「今だ！」

プリズムナイト「！」

ルファイ「ゴムゴムのJETガトリング!!」ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!

プリズムナイト「ぐあああつ!!」

マタタビ「ふんっ!」ヒュンヒュンヒュンヒュン!

ガンツ!

プリズムナイト「なっ盾が!?!」

闘士タロウ「止めだ!!」

マタタビのすてるすブルーメランでプリズムナイトの盾を弾き飛ばした。そしてプリズムナイトは目の前を見ると超闘士となつた闘士タロウは必殺のストリウム光線の構えをする。そして右腕をプリズムナイトに向けた。

これが超闘士タロウの最大必殺技!

超闘士タロウ「ストリウム超光波!!!」

ビシユウウウウウウー!!!

プリズムナイト「我が名はプリズムナイトおおおおお!!!」

ドオオオオーーーーーん  
!!!!

超闘士タロウの必殺光線でプリズムナイトは倒された。

ガンツ!

爆発で吹き飛ばされたプリズムナイトの剣が突き刺さった。

ルフィ「トリコ!」

プリズムナイトの正体はトリコ……誰もがそう思った……

ルフィ「え?」

ラブチャー「え?」

利吉「あ……く……」

マタタビ「利吉!」

お茶子「トリコさんじゃない……」

闘士タロウ「どういうことだ？」

プリズムナイトの正体、忍者チーム 山田利吉であった。

ラパパ「あいつらのお陰でブラックストーンはこんなに集まった！  
これで私はプリキュアになれる!!そして私は英雄になれる!!」

ルフィ達は利吉を解放し一体どういふことなのか事情を聞いた。

マタタビ「おい！利吉どうしてお主がプリズムナイトに……」

マタタビの言葉に利吉は地面に突き刺さった剣を見る。

利吉「あの剣は……意思を持った剣だ……」

闘士タロウ「意思を持った剣？」

一同は突き刺さった剣を見る。

利吉「この剣は強さを求めて強いものからさらに強い者へと乗り変わって行く……」

ラプチャー「そんなことが……」

利吉「あの剣を持つことでプリズムナイトの記憶や思考などが浮かび上がり、君たちの仲間や他の世界の戦士と戦う記憶が映し出された……そして剣とガトリングを持った黒猫……そして科学者を連れてこの世界に来てその黒猫が持つはずだったチケットを使ってここに来た記憶が浮かび上がった」

剣とガトリングを持った黒猫と聞いたマタタビはその猫に聞き覚えがあった。

マタタビ「キッド……キッドがこの世界にいるのか!？」

お茶子「マタタビくん?」

利吉「すまない……そこまでは……」

お茶子「ねえ……そのキッドってマタタビくんの」

マタタビ「友達じゃねー……」

お茶子「じゃあ「只……」?」

マタタビ「キッドを倒すのは拙者だからほおっておけねーからな……」

マタタビはすこし照れ臭く答えお茶子は納得した。

利吉「後……君達に伝えなきゃいけないことがある。」

「「「「「?」」」」」

利吉「この世界にはかつて歴史の闇に葬られた戦士が封印されている……その戦士の名は……」

利吉「銀河の覇者 ギャラクシーキュアブラック」

闘士タロウ「銀河の覇者……」

ラブチャー「ギャラクシーキュアブラック？」

ルフィ「なんだそりゃ？」

利吉「かつてプリキュウスの娘イングスの妹にあたるその強大な力



を怖れてこの地に封印した戦士、情報によれば彼女は仲間というものを否定し自分が最強であることにこだわっている……」

お茶子「でも……その魔法つかいプリキュア計画と一体なんの関係があるんやろ？」

闘士タロウ「考えたって仕方ない僕とルフィでラパパのほうに向かう。そして麗日とあすか、マタタビは地下に囚われたトリコ達を助けにいつてくれ」

ラブチャー「ああ……」

お茶子「でもトリコさんどこにいるかわからへんし」

マタタビ「拙者に考えがある……」

マタタビの提案に一同は凝視した。

マタタビ「この剣を持つことでそいつらがどこにいるのかわかるかもしれないねー」

「「「ええええええ!!」「」」」

マタタビの無茶な提案にお茶子は反対する。

お茶子「駄目だよもしそれを取ったらマタタビくんがプリズムナイトになっちゃおうよ!」

マタタビ「あの程度の方なら拙者は耐えられる……だからお前らあんな女に負けんなよ!」

マタタビはプリズムナイトの剣を握りしめた。

マタタビ「うわっ……くっ……うう!!」

t o b e c o n t i n u e d

ガキン！ガキン！

プリキュアスレイヤー「くっ！」

スラツシュ「ふっ！」

互いに火花が散る拳と爪の戦い……その時、

ゴゴゴゴゴゴ……

プリキュアスレイヤー「なんだ？」

モツプル「地震か？」

スラツシュ「ふっ！」

プリキュアスレイヤー「はっ！」

思いもよらない事態に二人はヒーローのスピリットファイギュアに手を携えた。

パシッ！パシッ！

パシッ！パシッ！

モツプル「兄貴！」

プリキュアスレイヤー「これだけか……」

プリキュアスレイヤーが手に入れたのは未来の仮面ライダーそして戦隊のスピリットフィギュアである。

そしてスラッシュは……

スラッシュ「……つち！」

スラッシュの手にはウルトラマン ガンダムスピリットフィギュアを手に入れた。

スラッシュ「今日はここまでね……」ブーーン！

スラッシュは両足に装備したボディが黒く染められ全身に傷だらけのストライカーユニットを履き2体の黒猫達と共に脱出した。

モツプル「兄貴！俺たちも！」

プリキュアスレイヤー「ああっ！」

プリキュアスレイヤーはモツプルの言葉に真っ直ぐに走って去っていった。

t o b e c o n t i n u e d

10話 ラパパの正体！私はプリキュアになる！

これまでのあらすじ……あらゆる異世界からエンドに集結した戦士達、チームに別れ優勝すればありとあらゆる願いが叶えられるという。戦士達はチームを結成し優勝を目指して戦いを繰り広げるのであった。

だがそれを妨害する謎の戦士プリズムナイト

強き者を求める女騎士、その正体は意思を持った剣であった。

そしてマタタビはプリズムナイトの剣を握りしめプリズムナイトの剣の記憶を辿って仲間の行方を探ろうとしていた。

マタタビ「ぐ……うう……」

プリズムナイトの剣を握ることで強力な意思がマタタビの意思を覆い尽くそうとする。

だがマタタビはそれをなんとか耐える。

お茶子「マタタビくん！」

マタタビ「近寄るな！」

お茶子が駆け付けようとしたがマタタビは剣を振るいお茶子を遠ざけた。

マタタビ「拙者は大丈夫だ！こいつでキッドの居場所を探る！そこにアイツもカカシもいるはずだ！」

剣の意志がマタタビを暴れさせるかのように剣を振るいマタタビ

はそれを耐えて地下の方に向かった。

前  
マタタビがプリズムナイトの剣をとることで地下の方に行く5分

闘士タロウ「僕とルフィとあすかは彼女のいる所に行く！お茶子  
ちゃんは彼を頼む！」

お茶子「うん！」

お茶子はマタタビの後を追った。

ーマタタビsideー

マタタビ「う……うう……」

憎いのか？

マタタビ「……」

復讐したいのか？

マタタビ「……」

同じようにキッドの目ん玉を取りたいか？

マタタビ「……」

お前が「あれは只の事故だから忘れていいと」言ってやれば安心して忘れてくれるのか？

マタタビ「違う!!」

あの時……「バカヤロー! 頭を冷やせ!」

クロ「うるせええ!!」

あの時のキッドは血が上っていた。我に帰った時、左目の方に血が出たことにキッドは取り返しをつかないことをしたことに後悔した。

マタタビ「この借りはいずれ返す! いずれだ!!」

キッドはそんな薄っぺらな奴じゃねえええー!!!

マタタビ「……」

マタタビはなんとか地下にたどり着きトリコとカカシがいた。

トリコ「マタタビ!」

カカシ「来たか!」

上の鎖に縛られたトリコとカカシ、そして上にいるのは

?「……」

マタタビ「……」

キッドって奴がそんなに骨のある男ならばキッドが安心してやりたいのならば……その眼帯がいつでもキッドの眼に映るように……



マタタビ「うあああー！！！」

バキン！バキン！

トリコ「うおつと！」

カカシ「ふー」

マタタビ「うう……うあああー！！！」

お茶子「駄目ー！！！」

バリエイー！！！！

一生そばにいてやれ！

マタタビは小さな檻を破壊し現れたのは……

ガチャ

バルルルルルルルルルル  
！！！！！！

バキンッ！バキンッ！バキンッ！バキンッ！バキンッ！バキンッ！  
！バゴオー！！！！！！

小さな檻から何かが飛び出し近くに置いてあったガトリングを装着しマタタビの手に持った剣を破壊した。

解放されたマタタビはそのまま倒れてしまった。

お茶子「マタタビくん！」

お茶子はマタタビに歩み寄ったが意識はなかった。

だが……

クロ「とつとと起きろ！」ゲシッ！

マタタビ「ぐえっ！」

2本足で立つ黒猫、破壊のプリンスことキッドことクロちゃんがマタタビの腹を思いつきり踏んだ。

クロ「てめえ……ギリギリまでだったらよかったものももう少しで斬れそうだったぞ！」

マタタビ「助けてやったんだ！礼ぐらいしろ！」

「……………」

猫と猫との喧嘩に一同は啞然とした。

一方ルフィ達ラパパのいる所まで走っていた。

あすか「みんな！」

ルフィ「？」

闘士タロウ「？」

あすか「あの時……みんなにキツイこと言ってすまなかった」

あの時……トリコとマタタビの戦いの後、勝手な行動で迷惑をかけてしまったことを謝罪した。

ルフィ「何いつてんだ？気にしてねーよ」

あすか「え？」

闘士タロウ「僕も君に厳しいことを言ったことを謝るよ。本来は僕達ウルトラ族は地球人を守る存在なのに……ごめん」

闘士タロウはあすかに頭を下げて謝罪した。

あすか「そんな！顔を上げてくれ！」

ルフィ「にししし！これで仲良くなったな」

ルフィはあすかと闘士タロウの手を取り合って握手させた。

ルフィ「あすか！タロウ！俺達はもう仲間だ！誰一人欠けさせたりしねえ！」

闘士タロウ「ああ！」

あすか「じゃあ！行こう！」

ルフィ達はラパパのいる所まで全速力で走った。

一方、救出したカカシ、トリコとクロはここからの作戦について話し合った。

カカシ「プリズムナイトの正体がこの剣だったなんてね・・・今じゃもう粉々に壊されたけどチャクラは感じないが異様な力を感じる」

クロ「こいつはとんでもねえほどの執念みたいなものも感じた。こんな奴を生み出すなんて相当ヤベー奴等らしいな」

マタタビ「だが剛はどこにいるのか気になるな」

クロ「それは知ってるぞ！」

クロが案内するとそこにいたのは・・・

剛「くかー・・・」

何か設計図のようなモニターが映されたままのんびりと寝てる剛がいた。

お茶子「はやく起こさなきゃ！」

クロ「なーにこっからはオイラにまかせな！」

クロは剛に近づくとクロはボクシングスタイルで何故かメビウスの輪のように動いた次の瞬間！

クロ「オラツ!!起きろ!起きろ!起きろ!起きろ!起きろ!起きろ!  
!起きろ!起きろ!起きろ!起きろ!!」

バキツ!ドゴツ!ボゴツ!ボグツ!ドガツ!ベキツ!

剛「ぐえっ!ぶえっ!ぼえっ!ドブエツ!!」

「ええええええええ!!」

トリコとお茶子は驚いて肥を上げた。

クロはテンプシーロールのやり方で剛を殴りまくった。

お茶子「ちよっクロちゃん!その人死んじゃうから...もうええつて」

お茶子は恐る恐るクロを止めようとしたがクロはスッキリとした表情で、

クロ「さて...冗談はこれくらいにして」パンパン

お茶子「冗談かい！」

クロのさっぱりとした言葉にお茶子は思わず突っ込みを上げた。

剛「おい……クロ……」

クロ「おっ起きたか？」

剛「お前！今のかなり痛かったぞ！」

お茶子「あのこれって……」

お茶子はモニターに映された映像を見て驚いた。  
そこに映っていたのは……

「ニコプリズムナイト!?」

剛「いや、これはその……」

トリコ「まさかてめえが黒幕か!？」

剛「いや違う！違う！ワシは頼まれたんだ！」

カカシ「頼まれた？」

マタタビ「誰に？」

剛「なんか……黒いフードを着たムギユツ！」

オドオドと説明をした剛にクロの足が剛の顔にめり込む。

クロ「黒いフードだ？そんなチンケなヒントで解るわけねえだろ  
!!」

剛「本当だ!!ワシはあのプリズムナイトに連れ去られて待っていたのは黒のフードを着た女性だった。その女性がいうには」

この世界で彼女と同じ奴を量産してほしいとそして完成したらある場所に転送させてくれと……

剛「だからワシは奴と同じような奴を作り出しある場所に転送させたんだ。しかしその場所はどこのかワシにも話してくれんかつムギユツ！」

またクロに足を顔を踏みつけた。

クロ「嫌なら断れよ!NOと言えよ!てめえのお陰でミーくんがいなくなったんだぞ!」

剛「え?ミーくん?ミーくんは?ミーくんはどこにいるんだ?」

マタタビ「実は……」

そしていろいろと訳を説明を聞いた剛はミーくんがいなくなったことに大層ショックを受けた。

剛「ミーくんが……あーあー……」

クロ「おい剛!ここからはミーくんの吊い合戦といこうじゃねーか?」

剛「しかし……一体どうやって?」

カカシ「なんでもこの地下にはギャラクシーキュアブラックが封じ込められているらしいがそれを復活する前に叩くこれしか方法ないでしょー!」

お茶子「でも一体どうやって……」

剛「そこは安心しろ……」

クロ「わかんのか？」

剛「このモニターに映し出された地図を目処にそのギャラクシーキュアブラックのいる位置に誘導してやる。」

モニターに映し出された地図が出されクロは両手で拳を受け止めて決意した。

クロ「よっしゃー!オイラとカカシと剛でギャラクシーキュアブラックのいる位置に誘導して止める!!お前らは上にいる奴を止めろ!」

お茶子「頼んだよ!」

トリコ「よっしゃー!行くぜ!」

3人はルフィ達のいる所まで走った。



クロ「マタタビ！」

マタタビ「……なんだ！」

マタタビは不機嫌そうに振り向いた。クロは笑って

クロ「サンキューな！」と言い放ち

マタタビ「……ああ」

マタタビはほくそ笑み気を取り直して走った。

ラパパ「ストーンがこんだけ集まった……これで私の願いが……」

闘士タロウ「待て！」

ラパパのいる間からルフイ、闘士タロウ、ラプチャーが現れた。

ラプチャー「あれは!!」

闘士タロウ「僕達が戦って手に入れたストーン!？」

闘士タロウは頭上を見上げると大会でゲットしたブラックストーンが巨大な石として謎の機械に収納されていた。

ラパパ「そう・・・あんた達が馬鹿みたいに手に入れたストーンは今や私の願いを叶えるための道具になったわ」

ラブチャー「願いだと?」

ラパパ「私の願いは・・・魔法つかいプリキュアのようなプリキュアになること!」

ラブチャー「プリキュア?それがお前の願いなのか?」

ラパパの予想外の返答に唾然とする3人

ラパパ「そうよ」

闘士タロウ(どういうことだ・・・この世界はギャラクシーキュアブラックを封じ込めるための世界であってラパパはギャラクシーキュアブラックを復活させるためにストーンを集めてた訳ではないのか?)

ラプチャー「貴様……これと何か関係があるのか？」

ラプチャーはラパパに魔法つかいプリキュア計画の紙を見せた。

ラパパ「ああ、それ！それは私がプリキュアになるために黒いフリーの女の協力で計画した物よ」

闘士タロウ「お前の目的はギャラクシーキュアブラックを復活させるためじゃなかったのか？」

ラパパ「ギャラクシーキュアブラック？何それ？」

闘士タロウ（知らない！……じゃあ彼女が言ってた黒いフリーの女って……）

ラパパ「まあ、いいわ特別に私の昔話を聞かせてあげるわ」

ラプチャー「昔話？」

ラパパは語った。

ラパパの家族はとても家庭環境が悪く、暴力、飲酒、ドラッグまでやるろくでもない家族だった。

母親からは虐待され身体中には痣、煙草の焼け跡などとても悲惨な

ものだった。

ラパパにとつてそれは屈辱、絶望、悲惨と呼ばれた日々が続いていた。

だがそれを彼女が唯一光が差し込んだのはプリキュアだった。

彼女は得に魔法つかいプリキュアが大好きでキュアミラクルやキュアマジカルが使う魔法を見てラパパも魔法つかいになりたいと願っていた。

だけどもある時、ついにラパパの家族は彼女自信を首を締めようとした。

母「あなた……働きもしないでただテレビを見るだけでいいご身分ね……あなたなんか死ねばいいのよ!!」

首を締めようとする母親、生死の境をさ迷ったラパパはあることを思った。

(私も……魔法を……こんな奴等を……殺す力を……ちよう……だい……)

バンツ!

父「ぐわっ!」

母「!?」

突然後ろから父親が撃たれた。母親はなんなのか振り向くと、

母「誰よ? あんた?」

? 「ふんっ!」ドンツ!

母「ぎやあああああ!!!」

母親の手から解放されたラパパが見たものは丸焦げになって死んだ母親と腹を貫かれた父親の死体とそこに立っている黒いフードの女

黒いフードの女「あなたはプリキュアになりたいんですか? 魔法つかいプリキュアに」

ラパパ「え?」

黒いフードの女「私と一緒にくれば・・・あなたを魔法つかいプリキュアになることを求めますよ。お嬢さん」

ラパパはその時、悟った。こんな屑の親と一緒にいたお陰で人の醜い欲望と家畜のように動き回るゴミそして自分自身を信じなければいけないと他の奴等なんてどうでもいいとわかった。

ラパパ「そしてその黒いフードの女はこの世界でありとあらゆる戦士達が戦って勝ったら出現するブラックストーンを回収すれば私の願い・・・プリキュアになることが出来る!!」

闘士タロウ「だから僕達をこの世界に集めさせ、チームを組んでストーンを回収したのか？」

ラパパ「ピンポンパンポーン！正解！・・・まっあんた達を見てなんか吐き気がしたわ！仲間を信じるとか仲間のために命をかけるとかバツカみたい！そいつらが何を考えているのかわかったもんじゃないわ！」

ルフィ「違い!!」

ラパパはテンションで大笑いをしている所にルフィの怒りの籠った言葉がラパパの耳に響いた。

ルフィ「仲間を信じるとか仲間のために命をかけるのは・・・仲間を死なせたくねえからだ!!仲間が何を考えているのか俺にもわからねえ！でも俺は仲間を信じている」

ラパパ「美しい友情だね・・・でもそれも全て破壊してあげる！私のプリキュア変身記念としてね!!」

闘士タロウ「何！ストーンが!？」

ラプチャー「彼女の元に……」

あの巨大だったブラックストーンが、ラパパの元に近づく。

ラパパ「さあ変身よ！ミラクルマジカル！ジュエリーレ！」

ドオオオooooooooooooon!!

ラパパがブラックストーンで変身した時、強い風圧の風が3人を覆う。そして風が解いた時、ラパパの姿は西洋の悪の魔女に近い風貌のプリキュアになった。

ラパパ「私の奇跡！キュアマギサ！」

闘士タロウ「マギサ!？」

ラプチャー「マギサ……魔女か？」

3人はラパパがプリキュア、キュアマギサになったことよって強いオーラが放たれていた。

マジサ「今からあんた達が私の敵キャラとしてやっつけてあげる!!  
キュアアップパパ!あいつらを外に放り出しちやえ!!」

「「うわああああ!!」」

キュアマギサの魔法で3人は外の方に放り込まれた。

t o b e c o n t i n u e d



## 11話 集結 6人の戦士!

マギサ「私のプリキュア記念に……まずはあんた達が私の敵つてことでやっつけてあげるわ! キュアアップラパパ! みんなあいつらをやっつけちゃって!」

キュアマギサは魔法で異世界の戦闘員達を呼び出した。

RWBYのグリム、シンフォギアのノイズ、アルカノイズ、ゴブリンスレイヤーのゴ布林、ホブゴ布林、テラフォーマーズのテラフォーマー、NARUTOの白ゼツそしてプリキュアのスナッキー  
チョイアーク、キュアロイドがルフィ、闘士タロウ、ラブチャーに襲いかかった。

ルフィ「こんにやろ!」

闘士タロウ「タアツ!」

ラブチャー「はあっ!」

3人は必死で戦闘員クラス敵と戦っていく。だが数が多すぎるためどこまでもつのかわからない……その時、

ヒュン! ヒュン! ヒュン! ヒュン! ヒュン!

スパーーーーー!!

ドオオオーーーーー!!!!

ルフィ「なんだ?」

闘士タロウ「今は……」

ラプチャー「まさか!」

戦闘員達の目の前に現れたのはなんとブーメランだった。そのブーメランが大量の敵を一掃し、そのブーメランをキャッチしたのは……

マタタビ「ふっ!」

ウラビテイ「みんな!」

トリコ「またせたな!」

ルフィ「トリコ!」

闘士タロウ「マタタビ!」

ラプチャー「お茶子!」

集結した3人そしてサッチュウも駆け付けた。

ルフィ「おし!行くぞ!」

「」「おう!!」「」

ボブA「ウアア!」

ボブB「ウアア!」



ドオオオーーーーー！！！！

エレファントガンの一撃でゴブリン達を一掃した。

ノイズ、アルカノイズが闘士タロウに襲いかかってきた。  
だが闘士タロウは満面の笑みで必殺技を放った。

闘士タロウ「ストリウム光線！」

ビイイイイーーーーー！！！！

ドオオオーーーーー！！！！

クマグリム「グオオオオ！」

ゴリラグリム「ウオオオオ！」

トリコ「この世の全ての食材に感謝を込めて……いただきます  
！」

トリコは手を合わせた後、両手から金属音の音が鳴った。

クマグリム「グオオオオ！」

トリコ「フオーク！」グサツ！

クマグリム「ウオオオ！！」

トリコ「ナイフ」バシユツ!

トリコの左腕を突くような形にしクマグリムの首を貫いた。そして右腕を手刀にしてクマグリムの首を切り裂いた。

ゴリラグリム「ウオオオオ!」

ゴリラグリムはトリコを羽交い締めにしようとしたがトリコは右の拳に力を貯めてゴリラグリムを殴った。

トリコ「10連釘パンチ!!」ドンツ!!

ゴリラグリム「ウオツ!」

一瞬強烈なパンチがゴリラグリムに炸裂したがゴリラグリム自身はなんともないと思ったその時、

ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!  
ンツ!!ドンツ!!

ゴリラグリム「ウオオオオオオオ・・・」

10発の衝撃波によってゴリラグリムは倒れた。

「「「ジョージ!!」」」

マタタビ「なっ!」

テラフォーマー達がマタタビを囲み袋だたきにしようとした・・・

だが

ブオオオーーーーー！！！！

ザシユツ！ズバツ！バシユツ！ドシユツ！

マタタビ「準備運動にもならん・・・」

マタタビのチェーンソーでテラフォーマー達を一掃した。

チヨイアークA「チヨイ！」

チヨイアークB「チヨイ！」

スナツキーA「キー！」

スナツキーB「キキー！」

ウラビテイ「ウワツ！とと」

スナツキー達とチヨイアーク達がウラビテイに襲いかかる。

ウラビテイ「やああああああ!!」ポンポンポンポンポン  
ン！

スナツキーA「キ？」

チヨイアークA「チヨイ？」

ウラビテイ「上つがれええー！！！！」

スナツキーA「キキ!？」

チヨイアークA「チヨイイ!？」

ウラビティは無重力でスナツキー達とチヨイアーク達を空中高く浮かび上がらせた。

ウラビティ「解除!」

スナツキー『キキキキキキ!!?』

チヨイアーク『チヨイイイイイイイイ?!!』

ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!  
!ドン!

ウラビティの無重力解除でスナツキー達とチヨイアーク達が空中から落下して地面にめり込んだ。

キュアロイド『ギギギキキ!!』

55体のキュアロイドがラプチャーに襲いかかる。

だがマジカル5のリーダーであるラプチャーにとってそのような数など屁でもなかった。

ラブチャー「ラブチャー！タロン！」

キュアロイド『ギギギー！！』

ラブチャー「はああああっ！！」

バシュッ！ズバツ！ドシュッ！ザクッ！ズバツ！ザクッ！ドシュッ！バシュッ！ズバツ！ザクッ！バシュッ！ドシュッ！ザクッ！ズバツ！ドシュッ！バシュッ！ドシュッ！ズバツ！ドシュッ！バシュッ！ズバツ！

キュアロイド『ギイーイー！！』

ドオオオーーーーーん  
!!!!!!

ラブチャー無双で55体もいたキュアロイドを簡単に斬り裂き爆散した。

マジサ「あんた達……」

マジサはガッツチーム全員が集結したことに歯を握りしめた。

ラブチャー「みんな！全員揃ったな！」



闘士タロウ「ああ！」

トリコ「やっと揃ったぜ！」

マタタビ「これでもう集まってるな」

ウラビティ「ガッツチーム全員揃ったね！」

ルフィ「よっし！みんな行くぜ！」

ONE PEACE モンキー D ルフィ

トリコ 美食屋 トリコ

ウルトラマン超闘士激伝 闘士ウルトラマンタロウ

サイボーグクロちゃん マタタビ

僕のヒーローアカデミア 麗日お茶子／ウラビティ

魔法少女特殊戦 あすか 大鳥居あすか／ラブチャー

そう！彼らは揃ったのだ！今この地に！

ルフィ「野郎共！行くぞおお!!」

「おうー！」

マジサ「ふんー！全員揃ったから何なの？いいわ。私にとっておきでやつつけてあげる！キュアアップラパー！大サタンちゃん、ムーちゃん、アルちゃん、ヴァンちゃん、私と一つになーれ！」

マジサはスーパー戦隊を苦しめた究極大サタン、モンスターファームの最凶モンスター ムー ファイナルファンタジーのアルテマ ウェポン、デジタルモンスターのベリアルヴァンデモンのカードがマジサの体に入っていくそしてマジサの体から光が放たれ、その姿は200mを越えた大怪物になった。

マジサ『これが！私にとっておきー！アルティメットデスデーモンこれであんた達を一人も残さず消してあげるわ！』

アルティメットデスデーモンになったマジサはその巨体の足が地面を踏んだことで大地震を発生させた。

ルフィ「そつちがでかけりゃー！こつちも」

ルフィは武装色で右腕を硬化しそれを口にくわえて風船を膨らますようにルフィの体もでかくなった。

トリコ「ルフィー！お前その体は……」

ルフィ「トリコ！俺は2年間の修行ででかい怪物と戦ってきたんだ。そして俺は身に付けた。」

ルフィの体は武装色の覇気と一体化したかのような体になり眼もつり目になり髪も逆立った状態であった。

ルフィ「ギア4！バウンドマン!!」

ラプチャー「でかい……」

サッチュウ「この男！侮れないチュウ……」

皆は呆然としそれを眺めていたアルティメットデスデーモンはルフィの姿に思わず笑った。

マギサ『ははははは！なんて不細工な姿なのそんなで私のアルティメットデスデーモンに勝てるっての?』

ルフィ「ああ！俺はこの力でお前をぶつとばしてやる!」

ルフィの自信のある姿にマギサはそれが面白くなく苛立ちを覚えた。

マギサ『ふーん……だったら殺してあげる！行け！アルティメットデスデーモン!』

マギサの指令でアルティメットデスデーモンは赤色の光線がル  
ファイ達に降り注ぐ！

ルファイ「うおおおおおおおおお  
!!!!!!」

ルファイは両足をバネを押しように引っ込めそれを離した瞬間  
ジェット機の如く飛び立った。

トリコ「俺たちも行くぞ！」

闘士タロウ「ああ！」

ラプチャー「お茶子！」

ウラビティ「うん！」

マタタビ「キッド！そちらの状況は！」

マタタビのマントの懐からトランシーバーを取り出し別のところ  
にいるクロに連絡した。

クロ「今見つかった！」

クロ、カカシ、利吉はギャクシーキュアブラックが封じ込まれているカプセルを発見しそれを邪魔するノイズなどグリムが立ち塞がった。

クロ「このやろー……」

カカシ「だったら……」

カカシはプリズムナイトに傷つけられた腕の所に血が流れそれを指で採り印を結んで術を唱えた。

カカシ「口寄せの術！」

ボワン！

カカシの時空間忍術 口寄せの術でカカシが契約している忍犬 八忍犬を口寄せしたのであった。

パツクン「カカシ！」

カカシ「パツクン！来てくれてすまないがちよっと手が混んでて

ね・・・」

パツクン「・・・わかった」

パツクンは目の前にいる多勢の敵を前にして八忍犬全員が戦闘体制に入った。

パツクン「おい！黒猫！」

クロ「あ？」

パツクン「この多勢の敵を前にしてお主はどう思う？」

クロ「・・・へっこつちはまだ暴れたりねえんだ！ここでストレス発散させてもらおうぜ！！」

カカシ「よし！やるぞ！」

カカシの合図で多勢の敵に突進していく。

ルフィ「ゴムゴムの！コングガトリング！！」



トリコ「何!？」

トリコの食技で体得したキャノンフォークが真剣白羽取りで受け止めた。

トリコ「だったら・・・キャノンナイフ!!」

グオオオオオオー—————!!!

マギサ『そんなんで私を倒せると思つて?』

アルティメットデスデーモン「グオオオオオオー—————!!!」

トリコ「うわあああああああ!!？」

アルティメットデスデーモンの口から吐くデーモンノヴァによってトリコを吹き飛ばした。

ウラビティ「あすかちゃん! マタタビくん! 行くよ!」





ラブチャー「あああああ!!」

ウラビティ「マタタビくん!」

サツチュウ「あすか!」

アルティメットデスデーモンの巨大な腕にマタタビとラブチャーはぶっ飛ばされた。

闘士タロウ「まだまだ!!」

アルティメットデスデーモンの頭上から闘士タロウは超闘士タロウとなり最大限の必殺技を放とうとする。

闘士タロウ「これで倒す!!」

闘士タロウは最後の切り札として必殺技を放った。

闘士タロウ「ストリウム!!超光波あああああ!!」

ビiiiiiiiiiiiiii  
!!

ドオオオー————ン  
!!!!!!

闘士タロウ「はあ……はあ……」

ストリウム超光波によって体力を削ってしまった闘士タロウ、あの必殺技で耐える敵はいないと思った。

かに見えた。

ブオオオー————ン!!!

闘士タロウ「!？」

ドオオオー————ン!!

闘士タロウ「ぐわあああ!!」

巨大な拳が闘士タロウを吹っ飛ばした。

マジサ「このアルティメットデステーションに効くと思ったの？間拔

け!』

ルフィ「だったらこれで終わりだああああああ!!」

ルフィは渾身の拳を力に込めアルティメットデスデーモンにぶつ  
けた。

ルフィ「ゴムゴムの!!キングゴングガーーン!!!」

マギサ『ふん!』

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ  
チバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ  
!!!!!!

ルフィのキングゴングガンを受け止めるアルティメットデスデー  
モンそれはまさに火花が散る対決でもある。

ルフィ「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

マギサ『こんなことで  
!!!!!!』

バリーイイイーーーーーん!!!



ルフィ「…………え?…………」

マギサ『あなたの夢は海賊王? バカじゃないの? そんな下らない麦わら帽子を返すために海に出たなんて信じられない』

ルフィ「…………」

マギサ『そしてトリコ! あなたは美食屋でありながら自分のコンビもろくに護ることも出来ずにいた。そんなんでよくソイツとつるんでいたなんてマジ信じられないわ!』

トリコ「…………」

マギサ『闘士タロウ! あなたの師匠は元々あなたの故郷を滅ぼそうとした張本人なのに。それを水に流すだなんてどうかしてるわ! いっそのこと弟子入りをした振りをして殺しちゃえばよかったのに…………あんなごく潰し宇宙人なんか!』

闘士タロウ「…………」

マギサ『そしてマタタビ! あなたの目んたまはあの黒猫に取られたんでしよう? いっそのこと出会う前から飢え死にさせるか殺しとけば良かったのよ! それくらい憎いんでしよう?』

マタタビ「……」

マギサ『そしてお茶子ちゃん！あんたにいいこと教えてあげるわ！』

ウラビテイ「え？」

マギサ『あんたの学校のクラスメート緑谷出久って奴は……』

マギサ『最初っから個性なんてないのよ！』

ウラビテイ「え？」

マギサの言葉にウラビテイは呆然とする。

マギサ『あいつは生まれつき無個性だったのよ！でもオールマイトが現れてその力を自分の物にして雄英に入学した。あいつはオールマイトから奪ったその力でプロのヒーローになろうとする！最低な人間なのよ！』

ウラビティ「……………」

マギサ『そして魔法少女ラブチャー』

ラブチャー「!!」

マギサ『あなたは子供の頃から魔法少女に憧れていた。憧れの魔法少女になってもでも現実残酷であんたの家族は冥獣によつて殺された。そして今度は仲間の魔法少女も死んでいった。あんたはこれを聞いてどう思う?』

ラブチャー「……………」

マギサ『答えられない?じゃあ「お前の言う通りだ!」え?』

マギサは返事も聞かずに攻撃しようとしたその時、ラブチャーの口が開きマギサに説いた。

ラブチャー「私は子供の頃から魔法少女に憧れていた。しかし現実



はそうはいかなかった。残酷で悲しみに道溢れて家族も仲間も奴等に奪い去られた……。だが！私は諦めなかった！今まで家族や皆と過ごした時間そして今いる仲間達が私の心を突き動かした！」

マギサ『!?!』

ウラビテイ「デクくんは……。困っている人を助けるのがヒーローだからって言った。例えばデクくんが無個性でも困っている人を助けたりしたこともあったはずや！それにデクくんがオールマイトから力を奪い去るなんて……。信じられない！オールマイトが大好きなデクくんはそんな理由で力を奪ったりせえへん！」

マギサ『え?』

マタタビ「確かに拙者はあの時、キッドに目んたまを取られた。だがキッド共に過ごした時間は貴重な物だった。そして拙者はキッドにそんな非道なことなんて好かん！自ら正々堂々！一騎討ち！それが拙者の流儀だ！」

マギサ『なっ!』

闘士タロウ「確かにメフィラスさんは僕達の故郷の星を滅ぼそうとした。だが闘士マンはメフィラスさんが滅ぼそうとした自分の故郷を復興しようとしたメフィラスさんの代わりに償おうと……。闘士

マンがメフィラスさんを真の武闘家と認めたとように僕もメフィラスさんを真の武闘家だと信じている!!」

マギサ『え?』

トリコ「俺は小松とコンビになる前から小松を護ることが出来なかった。どんな食材を捕ろうとも小松を護れず死ぬ思いをさせてきた・・・だがそれを助けてくれたのが小松だった!あいつはこんな俺を信じて、どんな猛獣だろうと引かずに俺を陰から支えてくれた!俺は小松を信じている!」

マギサ『ぐっ!』

ルフィ「おい・・・」

マギサ『ん?』

ルフィ「お前・・・俺がこの帽子のために海へ出たって言ったな・・・」

マギサ『ふん!それが何よ!』

ルフィ「ふぎけんああああ

あ—————」  
！！！！！！！！！！！！！！！！！！

マギサ『ひっ!?!』

ルフイの怒涛の大声が中にいるマギサの方に響き渡った。

ルフイ「俺が海に出たのはこの帽子だけじゃねー！エースやサボと一緒にかわした杯！そして海に出るための誓い！お前はそんなことも知らないでヘラヘラと・・・俺達の思い出の誓いを語るんじゃねえええ!!!!」

ルフイの怒りの声がマギサに響き渡り一瞬恐怖を覚えたがマギサは気を取り直してアルティメットデスデーモンに最後の攻撃の準備をした。

マギサ『ふん！そんなあんた達の思い出も私のプリキュアの力にひれ伏すのよ！行け！アルティメットデスデーモン！アルティメットノヴァ!!!』

アルティメットデスデーモン「おお・・・ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!」

アルティメットデスデーモンの口から巨大な赤黒いビームが発射

されルファイ達に直撃しようとする！

さて次回！

## 12話 形勢逆転！グレイトスーツ！

マギサ『これで消えちやええええええ!!』

キュアマギサが操るアルティメットデスデーモンのアルティメットノヴァがルフィ達に迫ってくる。

万事休すだと思ったその時、

? 「スーパーペリオルストライク!!」

ドオオオooooooooooooon!!!!

「「「「「!?!」」」」」

マギサ『え?』

? 「はああああああああ!!!!」

バアアアooooooooooooon!!!!

突然、金色のビームがアルティメットデスデーモンの必殺技を徐々に押しつけていき消滅させた。

ビームを放った張本人を見るとそこには体は金色の鎧に肩はさつ

き撃った金色のキャノン砲赤と白のラインがあり、頭は警察を模したバイザーで額に金色のSを司ったエンブレムを着けた戦士がいた。

トリコ「あなたは……」

？「自分は扶桑……いやパトレン1号土方圭助です。」

？「間に合ったね……」

ルフィ「誰だ？お前？」

？「ボンジュール、ルフィ君、トリコ君、タロウ君、マタタビ君、お茶子さん、あすかさん。僕の名前は高尾ノエル、又の名を孤高にキラメク快盗、ルパンエックス！」

ラプチャー「快盗？」

ルフィ「すつげえええー！！！！」

興奮して目をキラキラさせてるルフィ以外の5人は啞然としルパンエックスは手に持つてるアタツシユケースを開いた。

ノエル「君達がああの怪物を倒すには……僕が持ってきたこのルパンコレクションで倒すしか方法はない！」

ルフィ「ルパンコレクション？」

ウラビティ「なんですか？それ」

ルパンエックスが持ってきたアタッシュケースを開くと中身は赤、青、黄、緑、桃、銀6つの小さな人形であった。

ノエル「ルファイ君には赤を、トリコ君には青、タロウ君は銀を、マタビ君には黄色の、お茶子さんには桃色の、そしてあすかさんには緑の方を」

ルパンエックスは6人に人形を渡された。

タロウ「あの・・・これで何を？」

ノエル「その人形を胸に当ててるんだ」

ルファイ「当ててる？　こうか？」

ルファイが人形を胸に当てると・・・

カツ!!

ルファイ「うおっ！」

トリコ「これはっ！」

闘士タロウ「すごいっ！」

マタタビ「これは服か!？」

ウラビテイ「なんかかつこいい!!」

ラプチャー「これは一体?」

ノエル「それがそのルパンコレクションの力、その人形を胸に当てることによって強化服を着こなしそしてその力はどんな巨大な敵でも対等に戦えるほどの力を持っている!名付けてグレイトスーツ!!」

ルフィ「すっげえーサンジの家族が着てた奴にすこし似てるけどなんか力がみなぎるぞ!!」

トリコ「本当だ今なら奴を倒せるかもしれねえ!」

闘士タロウ「この力は超闘士に匹敵するぐらいか?」

マタタビ「あまり興味ないが仕方ない……」

ウラビテイ「うわあ!なんかかわええ!」

サツチュウ「あすか、なんともないチュウ?」

ラプチャー「ああ、サツチュウ、別にこのスーツにはなんともない……むしろ力がどんどん上がってきてるようだ」



6人が身に付けたグレイトスーツにはそれを身に付けた者達の限界を5倍に発揮できるほどの威力を持ったスーツであった。

バルルルルルルルル  
!!!!!!

敵を全て殲滅しクロとカカシ達は結界を張られるギャラクシーキュアブラツクのコアを壊そうとガトリングで撃ちまくった。

そして徐々にヒビも入ってきた。

剛「おお、クロ！あともう少しだ！」

クロ「ちっ！これで終わりだ！」

ドンツ！

クロは最後に残ったガトリング砲の弾の一発で結界のコアが破壊された。

マギサ『何それ？そんなんでアルティメットデスデーモンに立ち向  
かおうっての？そんな悪あがきここで終わらしてあげる!!』

アルティメットデスデーモンが6人を踏み潰そうとしたが6人素  
早く飛び散った。

最初に反撃に出たのはマタタビとラプチャー、グレイトスーツに  
よって強化されたブーメランとタロンの威力が試される。

マタタビ「どりやあああ!!」

ラプチャー「はああああつ!!」

スパンツ!

バシユツ!

マギサ『ええ？』

ドンッ!!      ドンッ!!

マギサは一瞬両腕が軽くなったような感触を感じ両腕を確かめると、

マギサ『……………嘘……………デーモンの腕が……………』

マタタビとラプチャーの斬撃によってアルティメットデスデーモンの両腕を見事に真つ二つに切り裂いたのであった。

ウラビティ「今度はウチの番やね!!」

頭上に浮かび上がる無数の巨大な岩石、ウラビティはグレイトスーツを身に付けたことで100mまでの岩を無重力で操作することが出来た。

ウラビティ「解除!!」

ブオン!ブオン!ブオン!ブオン!ブオン!ブオン!ブオン!  
ブオン!ブオン!ブオン!ブオン!

ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!  
!ゴン!ゴン!ゴン!ゴン!

アルティメットデスデーモン「グオオオオオ……………」



バシユウウウウウー！！！！

アルティメットデスデーモン「グオオオオオ!!!」

そしてトリコの後ろから必殺技の体制を準備していた闘士タロウはグレイトスーツによって強化されたストリウム光線をアルティメットデスデーモンの体に炸裂した。

マギサ『まだ……まだよ……私のプリキュアとしての活躍はここから「終わりだ!!」 え?』

最後に現れたルファイがギア4となりキングゴングガンの体制に入っていた。

ルファイ「俺達の願いを……お前の勝手なやり方で壊すんじゃない  
ええー！！！！」

マギサ『いや……来ないで!来ないで!』

ルファイ「ゴムゴムの!!!」

マギサ『いややめて!それ以上はやめてええええて!!』

ルフイ「レッドキングガアアー銃!!!」

マジサ『イヤアアアアアアア!!!』

ドオオオオオオオーooooooooooooooooooooん  
!!!!!!

ルフイのレッドホークを意識した炎の拳にはキングキングの顔が浮かび上がりまるで怒り吠えるかのようにアルティメットデスデーモンの顔を貫いた。

その時、アルティメットデスデーモンがやられたことによって爆散した。

土方圭助「よし!」

ノエル「ユピ!」

ノエルの言うユピそれはやったーと言う意味

これで魔法つかいプリキュア計画は彼らによって崩れ去ったのである。

次回 衝撃の最終回

# 最終話 復活！銀河の覇者 ギャラクシーキュアブラック

キュアマギサ「そんな……プリキュアの力を持つてる私が……こんな奴らに……」

アルティメットデスデーモンになったキュアマギサは現れた新参者 パトレン1号 ルパンエックスによってルパンコレクション、グレイトスーツを身に纏った6人によって倒されたのであった。

だが……

スッ……

突然、マギサの持っていたブラックストーンが宙に浮かんだ。

闘士タロウ「ブラックストーンが宙に浮いた！」

そのブラックストーンが地中に深く入り込んでいった。

その地中の先には……

ギララクシーキュアブラックのコアを破壊し粉々にしたクロとカカシは一安心して一休みしていた。

クロ「ふー……なんとなく終わったな……。元の世界に戻つたら昼寝するか……」

ドドドドドドドド!!!

カカシ「ん!？」

カカシは何かに気づいた。

クロ「どうした?」「ビービービー!」ん?」

クロの持っていたトランシーバーから剛の通信が入った。

剛「クロ!クロ!おい聞こえるか!!」

クロ「なんだよ?剛?コアは破壊したぞ?」

剛「違う!何か強力なエネルギー体がお前達の方に向かってきている。気を付けろ!!」

クロ「何!？」

ドオオオオオooooooooooooooooooon!!!



カカシ「なんだ？」

天井を突き破って現れたのは巨大なブラックストーンだった。

その時、粉々に砕け散ったギャラクシーキュアブラックのコアの欠片がブラックストーンの光に導かれるかのように集まった。

カカシ「欠片が全て修復していく……これは」

全ての欠片がコアの姿に戻り、コアがブラックストーンと一つになった。

バアアアアーーーーー  
!!!!!!!

クロ「うわああっ!!」

カカシ「くううう!!」

ブラックストーンとコアが一つとなって黒い雷を発しながら上へと飛んでいった。

クロ「おい……剛どうなってんだ？あのコアがもとに戻って石と一つになったぞ」

剛『そんな馬鹿な!』

クロの言葉に剛はショックを受けた。

ドオオオoooooooooooo!!

ルフィ「なんだ!？」

土方圭助「あれは!!」

ノエル「そんな!？」

ラパパ「何?何なの?」

ピシピシ……



今日の前にいる少女こそプリキュウス娘でありキュアブラックの妹と呼ばれた最強を目的とする少女、  
ギャラクシーキュアブラック彼女であった。

ラパパ「ギャラクシー・・・キュアブラック？もしかしてあんたもプリキュア!?丁度いいわプリキュアならあいつらをやっつけて！あんたプリキュアだから強いんでしょ！」

Gブラック「・・・・・・」

ラパパ「何じつと私のほう見てんのよ！はやくあいつらを倒しなさいよ!!」

ギャラクシーキュアブラックはラパパの命令に従わずギャラクシーキュアブラックはラパパを見て何かを感じたのかラパパのほうに近づきつつあった。

ラパパ「ちよつと何よ!?!私じゃなくてあいつらよ！相手間違えんじゃないわよ!!このボン「ドスツ!!」ぐっ!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ギャラクシーキュアブラックはラパパの腹を突き刺しラパパの体から取り出したのはラパパのプリキュアコアであった。

お茶子はラパパの体がギャラクシーキュアブラックに突き刺した場面を見て目を背けてしまった。

ギヤラクシーキュアブラック「……………あーん」バクツ

もぐもぐもぐもぐ

ラパパのプリキュアコアをギヤラクシーキュアブラックはひと口で食べてしまったが……………

ペツ！

Gブラック「……………まずい……………これは駄目な奴だ……………」

ラパパ「あ……………ああ……………」

Gブラック「お前は……………もう消えろ」

ギヤラクシーキュアブラックは右手で指を……………

パチンツ！

ラパパ「あ……………ああ……………そん……………な」

ギヤラクシーキュアブラックがラパパに向けて指を鳴らしたことでラパパの肉体が消滅し白骨だけになった。

ルフィ「あいつ……………!!」

闘士タロウ「指を鳴らしたことで白骨にした!!」

Gブラック「……姉の感じがするそれに母の感じも……それだけじゃない……他に力の強い戦士がまだまだいる……」

ギャラクシーキュアブラックはにやけて強い戦士プリキュアが多数いることに歓喜の笑みを出した。

Gブラック「もう……この世界に用はない」

ギャラクシーキュアブラックは右手を上空に掲げた。

Gブラック「ブラックサンダー!」

バチイイーーン!!

ブラックサンダーを右手に受けたギャラクシーキュアブラックはラパパを白骨にさせたように指を鳴らそうとした。

土方圭助「これは不味い!!」

ノエル「コタロー君!!僕達と今この世界にいる人たちを転送させるんだ!!今すぐ!!」

マタタビ「コタロー?」

ノエルの言葉にコタローの名前を聞いたマタタビは反応した。

Gブラック「プリキュア……」

ノエル「間に合ってくれ!!」

Gブラック「ギャラクシー……エンド」

パチンツ!

ン オ  
!!!!!!!!!!!!!!

ド

オ

オ

オ

オ

オ



ここは宇宙空間ギャラクシーキュアブラックの必殺技によって惑星エンドその物を破壊したのであった。

Gブラック「……姉と母を殺すためにはまず他の戦士の力を取り込む……私のやるべきことはそれだ」

ギャラクシーキュアブラックはそれを目標とし、宇宙を飛び回った。プリキュアの力を取り込むという目的を

? 「起きて！」

? 「起きて！」

? 「起きてよ!! マタタビくん!!」

マタタビ 「ん!」

マタタビの片目に写っているのはキッドと同じ猫の服を着ている隣にはロボットのライオンが傍にいた。

マタタビ 「コタロー……コタローなのか!」

コタロー 「うん! そうだよ! マタタビくん!」

クロ 「あたた……ここはどこだ?」

コタロー 「クロちゃん!!」

Dank 「アオ!」

クロ 「コタロー! ダンク!」

お茶子 「わっ! ライオンのロボットがいる! なんかかわええ!」  
トリコ 「うおっ! なんだこいつ!」

ルフィ「うおおおおお！なんか飛べそー！！ビーム出そー！！」

ルフィは Dank を見て目をキラキラさせた。

闘士タロウ「ここは一体……」

ノエル「ここは僕達の船、異次元戦艦　マイティアーク！その内部  
さ！そして利吉君はこの船の医療室で治療中だよ」

ルフィ「なんだ？お前？」

ノエル「この姿では初めてだね。僕がルパンエックスこと高尾ノエルさ！」

ルフィ「えええー！！お前がああの銀色の奴か！！」

ノエル「そして僕の隣にいる彼が……」

土方圭助「パトレン1号、土方圭助です。」

ルフィ「おう！よろしくな！」

ルフィはノエルと圭助にガッチリ握手した。

クロ「おい！剛はどこだ？」

剛「ううう……」

あすか「おい……トリコ」

トリコ「どうしたあすか？」

あすか「あんたの足……」

トリコ「ん？」

トリコの足元を見下ろすとそこにいたのは

剛「う……うう……」

トリコ「あ！」

トリコの足に踏まれた剛博士がいた。

剛「ワシがこの船に転送させられてそこから彼の体に潰されて挙げ  
句の果てに踏みつけるなんて……」グスグス……

トリコ「おい！泣くなよ！」

サツチュウ「いい歳こいたおっさんが何やってるチュウ」

コタロー「早速だけど！みんな！」

コタローはルフイ、トリコ、闘士タロウ、クロ、マタタビ、お茶子、あすか、サツチュウ、カカシ、剛に問いかけた。

コタロー「早速で悪いけどこれからみんなにやってもらいたいことがあるんだ」

ープリキユアキャツスル ブレインの研究室内ー

キュアロイド「ギ！ギギギ！」

ブレイン「そうですか。ご苦労様です」

キュアロイドがブレインに渡した小瓶の中身はプリズムナイトの剣の欠片であった。

ブレイン「もういいですよ。後は此方で対処します。」

キュアロイド「ギ！」

キュアロイドはブレインに敬礼をし、研究室から出た。その時、

デビル「おい！ブレイン！」

ブレイン「どうしましたデビル？そんなに血相を変えて……」

デビル「どうしたもこうしたも、あのギャラクシーキュアブラックが復活したらしい！」

ブレイン「ほう……」

デビル「何がほうだ!!このままだとプリキュウス様にもしものことがあれば……」

ブレイン「心配ありませんよ……今のプリキュウス様にはキュアブラックとキュアアンジェの力を取り込んでいるんですよ……」

例え完全体となったギャラクシーキュアブラックでも私の作った兵器とプリキュウス様がいれば勝てる確率が高い……」

デビル「何!？」

ブレイン「だから心配要りませんよ。こちらも対策は考えてあるんですから……これを」

ブレインはデビルにモニターを見せるとそこにはプリズムナイトのアーマーを着せたキュアロイドのデータであった。

デビル「これは……」

ブレイン「これは対グランガードあるいはゼロフォウルあるいは対ギャラクシーキュアブラックに作り上げたプリズムアーマーと呼ばれる鎧、それを量産型のキュアロイド達に装着させるのですよ。」

デビル「それを装着して奴等には勝てるのか？」

ブレイン「勝てるのか？勝つんですよ！我々を木偶人形呼ばわりするゼロフォウルを倒すためにこの鎧を作り上げたのですよ!!今ここで眠っている彼女達の出撃を温存するためにはこのような効率がとてもいいんです！」

デビル「うっ！」



ブレインの威圧的な言葉にデビルは圧倒されもう言葉が頭に入らなかった。

デビル「わかった・・・プリキュウス様については私が説明してくる・・・引き続き研究を続けてくれ」

ブレイン「ええ」

デビルはブレインの部屋を後にしてプリキュウスのいる所に向かった。

そしてブレインはある人物に電話をした。

ブレイン「もしもし・・・私です。彼と交代してください」

? 「私だ」

ブレイン「どうですか? 私が送ってくれたデータで貴方の作った玩具がより強化したでしょう?」

? 「まあな・・・だがそれがいつバレるか」

ブレイン「バレませんよ。私の送ったデータで今は貴方が提案した兵器だということになってるんですから。気を落とさないでください。まっくれぐれも私の名前を得にヘイトレッドには喋らないでくださいよ!!」

? 「わ……わかった!」

ブレイン「それと……今赤の勇者が火と氷の戦士を仲間にしたそうですね。残りの雷、虫、天の戦士を仲間にするのなら……ほおっておきましょう」

? 「なっ! ほおっておくだ?! 何故だ!」

ブレイン「例え赤の勇者が5人の戦士を仲間にしても肝心の『覚醒の剣』がなければその本来の力は発揮しない……だから今はストライクウィッチーズの世界の調査を行うことを賛成します。もしいやならアナザーヒーローかあなた方の手にいれたスピリットフィギュアだけでも出せばいいです。」

? 「ストライクウィッチーズ……あの軍人の魔女達がいる世界か……」

ブレイン「そう、その世界のどこかに宮藤一郎によって隠された秘密の場所があるはず……それに専念することをおすすめします……」

？「宮藤一郎……か……奴はストライカーユニットの開発者であり宮藤理論を立ち上げた創設者だな。だがデータに寄れば奴はブリタニアでネウロイの攻撃で死んだと……」

ブレイン「本当にそうですか？」

？「え？」

ブレイン「奴が仮に死んだとすれば死体の腕や足の焦げた形跡があるはず……だが死体すらなく墓まであるとは……それに奴は娘の宮藤芳佳に手紙と専用のストライカーユニット震電の設計図まで送り、その完成品を宮藤芳佳のもとに送った。これは不自然ではないですか？死んだ人間から手紙を送り届けるなんてね」

？「まさか……宮藤一郎は……」

ブレイン「ええ！生きてますよ！奴はネウロイの攻撃で死んだと思いついてどこか別の世界で勇者の手助けをしている！そして奴は勇者をストライクウィッチーズの世界に導かせその覚醒の剣が隠された場所に連れ込むというシナリオを用意しているらしいのです……」

？「であればワシらがやるべきことは……」

ブレイン「宮藤一郎に親しかつた人物及び家族などを調査尋問しても吐かせるのです!!」

？「わ……わかった」

ブレイン「頼みましたよ」ガチャン

ブレインはその人物との会話を切り、ブレインは立ち上がった。

ブレイン「ストライクウィッチーズ……」

ブレインは本棚の黒色の本のほうを押すとそこから地下に繋がる階段があつた。これは他のジエネラルプリキュアもプリキュウスも知らない場所でありブレインはその階段から降りていった。

ガツン　ガツン　ガツン

ブレイン「彼女達得に501のウィッチは異常だらけです。リネットビショップは実践訓練では上手いどころか実戦では間抜けと聞いていいほどのクズ……故に宮藤芳佳と接触したことで彼女の中には黒い心を生み出した。そしてゲルトルートバルクホルン、彼女はカールスラントの戦いで妹を意識不明にさせたせいを無視し宮藤芳佳を妹と見なして可愛がっていたこれも典型としたクズ、シャーロット E イエーガー彼女はリベリオンでポンネヴィル・フラッツで新記録を達成しウィッチ隊に入隊、そして奴はスピード狂と呼ばれ自由気ままに活躍してるとのこと……そしてフランチェスカ ルッキーニ、彼女は幼くして固有魔法を発生させ天才児として人々に讃えられたが実際は古郷のロマーニャに帰りがついていたただっ子であり、今はイエーガーと行動することが多くイタズラ好き……ペリーヌ

クロステルマン……彼女は青の1番と呼ばれる異名を持ちガリアの為に全力を尽くす……。のにもかからわず坂本美緒に溺愛するようになった……。エーリカ ハルトマン彼女はカールスラントでウルトラエースの一人として多数のネウロイを撃墜させた記録を持ちながらも私生活はゴミだらけでエースの姿などどこにもない。そしてエイラ イルマタル ユーティライネン、彼女は固有魔法、未来予知でスオムスのエースとして崇められネウロイの攻撃を一回も食らったこともないだから彼女は訓練なんて必要ない……。むしろ彼女自身強いという自己中心的存在であるそして彼女はオラーシヤのウィッチのサーニャ V リトヴァクに溺愛している……。自己中心的で未来予知に頼りオラーシヤのウィッチに溺愛してるとは正しくクズの中のクズですね……。そしてサーニャ V リトヴァク彼女はウィーンで音楽を学ぼうとしていたがネウロイの襲撃によって音楽の道を斬り捨てオラーシヤの為にウィッチとして活躍……。夜間哨戒でユーティライネンと一緒に出撃することが多い……。ユーティライネンの場合……。愛人というより……。母親に甘える子供にしか見えないですね……。そしてミーナ デイートリンデ ヴィルケ……。彼女には愛していた男がいた彼の名はクルト、だがヴィルケは仲間のウィッチと合流したが彼自身は残りネウロイの攻撃で亡くなった。そしてヴィルケはその悲しみを他の仲間にも味あわせないために規律を作り上げ男性整備員及び男性軍人との接触を避けさせる……。だが彼女はそのクルトの替わりか坂本美緒を溺愛している……。そして坂本美緒、彼女はもともとあんな豪快な女性ではなく泣き虫でなにもできない無能な少女であったが師の北郷章香や仲間の岩本徹子、竹井醇子に支えられ宮藤一郎との関係も繋がっている……。だが彼女にはあるトラウマがあったそれは……。彼女には……。おつと着いたか」

ブレインがストライクウィッチーズの隊員の解説をしながら降りてきて目的の場所までたどり着いた。

ギイイイイイ……

ブレインが扉を開くとそこにはストライカーユニット震電が置かれていてそしてブレインの目の前にいるのは培養液の中で丸いガラスの中で眠らされてる……

ブレイン「お久しぶりですね……宮藤芳佳さん」

宮藤芳佳がいた。

ブレイン「貴方がこの城に転送されプリキウス様に処刑されず私が匿ったお陰で今あなたはこの地下で隠れている。よかったですね……殺されずに済んで」

芳佳「……」

ブレイン「貴方の仲間は心配要りませんよ。貴方のお陰でロマーニヤのネウロイの巢は消滅しロマーニヤは解放されたのですから」

芳佳「……」

ブレイン「ネウロイは消えて人は平和の道へと歩み寄る………  
のですが……」

ブレインは眠っている芳佳に思いつきりガラスを強く押し、こう答えた。

ブレイン「そろそろウィッチには消えてもらおうと思っ  
ていま  
す……」

芳佳「……」

ブレイン「このジゲンドライバーとこのアナザーライドウォッチで  
ね……」

ブレインはアナザークウガからアナザージオウまでの20個のア  
ナザーライドウォッチを見せた。

コタロー「赤の勇者、勇光総督くんがストライクウィッチーズの世界に来るまでの間に僕達はまだ取っていないスピリットフィギュアを手にいれなければならないんだ！」

コタローは巨大モニターを出現させてこれまで総督がゲットしたスピリットフィギュアとまだ黒くシークレットになっている部分のフィギュアもあった。

コタロー「総督くんが手にいれてないフィギュアの中でウルトラマンは10個、仮面ライダーは88個、スーパー戦隊は18個、他のヒーローは4個、全部で120個これを全て集めるんだ!!」

お茶子「ねえ？そのフィギュアが全部集めるとどうなるん？」

コタロー「そこまではわからないけど・・・話によれ全ての戦士の力が揃えし時、勇者は光となりて闇を切り裂くとか本に書いてあったけど・・・」

クロ「なんだそりゃ？」

マタタビ「要するにフィギュアを全部揃えればいいんだろ？」

コタロー「うん！」



コタローは頷いた。

コタロー「でもゼロフォウルにもスピリットフィギュアを持つてるんだ。」

コタローはモニターに映し出されたゼロフォウルが所持しているフィギュアを映した。

ウルトラセブン、仮面ライダーリュウガ、仮面ライダー王蛇、仮面ライダーオーティン、仮面ライダーサイガ、仮面ライダーオーガ、仮面ライダーグレイブ、仮面ライダー歌舞鬼、仮面ライダーサソード、仮面ライダーキックホッパー、仮面ライダーパンチホッパー、仮面ライダーダークカブト、仮面ライダーコーカサス、仮面ライダーネガ電王、仮面ライダー幽気、仮面ライダーサガ、仮面ライダーダークキバ、仮面ライダーレイ、仮面ライダーアーク、仮面ライダーエターナル、仮面ライダーソーサラ、仮面ライダーワイズマン（白い魔法つかい）、仮面ライダーデューク、仮面ライダーシングルド、仮面ライダーマルス、仮面ライダー邪武、仮面ライダーファイフティーン、仮面ライダーゲンム、仮面ライダークロノス、仮面ライダーエボル、仮面ライダーキリバス、ドラゴンレンジャー、ガオシルバー、アバレキラー、ウルザード、黒獅子 理央、獣人メレ、キョウリユウネイビー、トツキユウ1号、ジュウオウザワールド、デスファード、インパクターロギア、デモンナイト、ジャツカルなどである。

クロ「ゼロフォウルの方が多くとってんな？」

コタロー「もしかすると接触して戦うかもしれないよ……」

クロ「いいじゃねーか戦いになってもその方がおもしろーし」

マタタビ「拙者もあの星では窮屈だったから別の所で戦うのもいいらしい……」

トリコ「俺も参加するぜ！」

闘士タロウ「僕も！」

お茶子「ウチも!!」

あすか「私も手伝うよ！フィギュア集め」

サツチュウ「あすか！」

あすかのきつぱりとした返事にサツチュウは慌ててサツチュウに寄り添う。

サツチュウ「いいんでチュウか？元の世界ではくるみ達が待つてるチュよ！」

あすか「確かに元の世界には帰りたいが……何かいやな予感があるんだ……冥獣よりも恐ろしい何かを……」

カカシ「だそうだとコタローくん！みんな考えていることは同じだ！」

コタロー「よし！それじゃ僕が調べた指定した世界でフィギュアを

集めてね！頼んだよ！」

お茶子「でもウチらだけじゃまだ少ないから一先ずウチらの元の世界に戻って仲間を集めるだけ集めにいかせてや！」

コタロー「うん！いいよ！」

コタローはルフイ、トリコ、闘士タロウ、お茶子を転送装置で元の世界に戻った。

そしてこの話は序章に過ぎない。  
彼らの物語は勇者の物語と繋ぐ……

異世界最強決定戦へん

ここで完結！

とある世界に戻ったプリキュアスレイヤーと妖精モツプル 彼らは手にいれた仮面ライダーとスーパー戦隊のフィギュアの転送の準備をしていた。

プリキュアスレイヤー「モツプル」

モツプル「あいよ！」

モツプルは6つのフィギュアが入ったアタッシユケースを転送装置の方に置かれ、転送開始された。

プリキュアスレイヤー「行くぞ……」

モツプル「おい！待てって」

プリキュアスレイヤーは任務を終え去ろうとした。

モツプル「お前さ……本気でやるのか？お前の姉「聞くな！」うっ  
！」

プリキュアスレイヤー「あれはもう姉じゃない……」

プリキュアスレイヤーの目の瞳にはなにか寂しげな思いを寄せていた。

プリキュアスレイヤー「俺の目的はキュアブラックを殺すことだ……俺はそれでいい……」

モツプル「……亮太」

プリキュアスレイヤー……本名 美墨亮太 美墨なぎさキュアブラックの弟であり、プリキュア、キュアブラックを殺すことに執念を燃やす青年である。

ウオズ「やあ、みなさん、私は我が魔王、常磐ソウゴの家臣ウオズであります……この本によれば常磐ソウゴはゲイツ、ツクヨミ達はタイムジャッカーさえも知らないアナザーライダーが現れる3人は出会うのある。魔王のジオウ常磐ソウゴ、勇者のジオウ勇光総弩との接触はストライクウィッチーズの世界で……あとストライクウィッチーズで思い出したことが一つ、ブレイブウィッチーズのスオムスのウィッチ ニッカ エドワーデイン カタヤイネンは魔法先生 ネギま!?!の世界にいた。しかし今の彼女は……おっとここからは喋りすぎましたね……ではみなさん……我が魔王の物語は短編で本編の勇者の物語と繋ぐ話になるのでまた会いましょう……では……」

N E X T   S T O R E ↓